慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治期慶應義塾への朝鮮留学生(一)
Sub Title	Korean students at Keio during the Meiji period 1
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko) 王, 賢鍾(Wang, Hyeon Jong)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2014
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.31, (2014.) ,p.238(55)- 292(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介 挿表
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20140000-0238

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十一巻（二〇一四年）
資料紹介

明治期慶應義塾への朝鮮留学生（一）

西沢直子・王賢鍾

１．先行研究

明治14（1881）年６月、朝鮮から朝士視察団の随員として来日していた兪吉濬と柳定秀が慶應義塾に入学した。慶應義塾にとって、初めての海外からの留学生であった。次いで明治16年頃には、開化派金玉均の仲介により約60名が入学したといわれている。ただその時の留学生のほとんどは、翌年の甲申政変に参加し、殺害されあるいは行方不明になったとされていて詳細は不明である[1]。その後、明治28（1895）年前後に190名ほどの学生が入学した。すでに研究報告がなされているように、明治28年８月には朝鮮学部大臣李完用と慶應義塾の間で朝鮮政府委託留学生に関する契約書が取り交わされ、またこの時の留学生については、慶應義塾の入学記録で入学者の名前や出身、年齢、父兄名などが判明している。

朝鮮からの留学生はその後しばらく途絶え、明治37（1904）年に韓国皇室特派留学生50名が来日、以後私費留学生も増し、明治40年には朝鮮政府が「留学生規程」を定めた。ただ、明治37年以降の留学生で慶應義塾に入学する者はごくわずかで、官立もしくは他の私立学校（現明治大学、中央大学、早稲田大学など）に入学している[2]。

朝鮮から慶應義塾への留学生については、最初の留学生である兪吉濬、あるいは明治28年の留学生を中心に分析がなされてきた。後者の詳細な研究としては、阿部洋「旧韓末の日本留学―資料的考察―（Ⅰ）～（Ⅲ）」（『韓』第３巻第５号～７号、1974年）、「福沢諭吉と朝鮮留学生―一八九五年「朝鮮政府委託慶應義塾留学生」の場合を中心にして―」（『福沢諭吉年鑑』第２巻、1975年）が挙げられる。また明治23年に発足した慶應義塾大

学部だけを対象にした論考には、朴己煥「旧韓末と併合初期における韓国人の日本留学」(『近代日本研究』14、1997年）がある[3]。

これらの先行研究は、いずれも入学者に対し数量的な分析を試み、全体的な傾向から朝鮮からの留学生が持った意味を読み解こうとするものであった。こうした調査を踏まえ、研究を次の段階に進めるためには、各人物の個別研究の進展が必要であろう。福沢研究センターでは1980年代後半に、明治期に慶應義塾で学んだ人びとが、その後いかなる職業に就き、あるいはどのような業績を残したかについて、和歌山や沖縄をはじめとして、多くの地域で調査を行ったが、特定の人物を除き、これまで留学生についての個別調査は行われてこなかった[4]。本稿では、「慶應義塾入社帳」や『慶應義塾学業勤惰表』といった慶應義塾側のデータと『大韓帝国官員履歴書』から得られるデータを、各留学生に対する個別研究を進めるうえでの基礎的情報として提示する。さらに今後の留学生調査ついても言及したい。

2．慶應義塾学事関係資料にみられる朝鮮留学生

1）「慶應義塾入社帳」および『慶應義塾学業勤惰表』

文久３（1863）年春以降の入学者については、「慶應義塾入社帳」と呼ばれる名簿が残っている。福沢諭吉は慶應義塾に関わる人びとを、ともに学ぶ仲間として「社中」と呼んだ。そのため入学時の記録は、社中に入るという意味で入社帳と呼ばれている[5]。もっとも古い入社帳は、無地の美濃判を綴った和装本で、表紙題箋に「性〔ママ〕名録」とあり、年月日、藩名あるいは主人名、姓名が記され、年月日の下には「入門」「入塾」と記されている。慶応４年４月からは、表紙題箋に「姓名録第一」とある冊子に引き継がれた。ちょうどそれまで名称のなかった塾が、「慶應義塾」と命名された頃にあたる。この時から書式が定められて、印刷された罫紙に記入されるようになり、判明する個人情報も増加する。入社帳は、明治34年11月（日未詳）の入学生を記録した第29号まで続き、記載者数はのべで15,401人になる。

次に在学期の情報を示す資料としては、成績表にあたる『慶應義塾学業勤惰表』（もしくは『慶應義塾学業勤怠表』、以下勤惰表と略す）が存在する。明治４年に学則類や生活上の諸規則などを定めた『慶應義塾社中之約束』が発行され、それに基づき、全在籍者の名前を等級別・成績順に掲載

した勤惰表が、印刷配布されるようになった。勤惰表から得られる個人情報は成績のみであるが、いずれの等級に属しているか、あるいはどのような科目の成績が記されているかによって、ある程度慶應義塾での学習状況がわかる。勤惰表は当初毎月発行され、明治６年３月からは学期別（１年３学期制）となった。現存する勤惰表は、明治31年１～４月期までである。明治５年７月、12月、明治９年８～12月期に相当する勤惰表は現存しておらず、もともと作成されなかったのか、発見されていないのかは不明である。また明治13年５～７月および９～12月期は大きく欠損したものしか残っていない。勤惰表のデータ数は、１学期の１人のデータを１件として数えると、66,405件にのぼる。

本来であれば勤惰表は、先の入社帳に記載された人物について記録されているはずである。しかし実際には、入社帳には記載がないにも関わらず、勤惰表には掲載されている人物がある。福沢や教職員の子ども、女子をはじめとし、特殊な例ではなく、かなりの数が存在する。ただこの点については、次のことに留意しなければならない。

入社帳は「姓名録第一」の時点から本人自筆ではなく、本人から提出された書類に基づき、学事担当者が記入したと推察される。ゆえに姓名であっても、誤って記入されている可能性がある。また勤惰表は明治期の印刷物であるため、誤植が非常に多い。植字工が活字を拾う作業のうえで、同音だけではなく、形状が似ているもの（たとえば植と値、雄と確など）の混同も多くみられる。さらにこの時期は一般に、姓名であっても使用される漢字が混用される。たとえば「次」「二」「治」、「辺」「部」などは、その区別が厳密ではない。つまり入社帳に名前がなく勤惰表だけに記載がある人物は、入社帳に記載がないのではなく、異なる名前で掲載されている可能性も高いということである。

その際勤惰表には名前と成績しか記されていないので、同じような名前の人物が同一人物か否かを決定づける手立てがない。すなわち、入社帳と勤惰表のデータを合わせることによって、慶應義塾における就学状況は明らかになるのであるが、この２つの資料に登場する人物の同定作業は、極めて困難を伴う。２つの資料間はもちろんのこと、勤惰表の各学期間でも同様である。加えて明治期までの日本において、改姓名が頻繁になされることも同定作業の困難さに拍車をかけている。

このような資料的性格を踏まえたうえで、まず慶應義塾側の資料に記載

されている朝鮮からの留学生に関する情報から見ていきたい。入社帳登載者、すなわち文久３年春から明治34年11月までに入学した記録がある人物で、住所表記が朝鮮となっている者は、203名である。そのうち２名は日本人で、京城日本公使館駐在員と仁川日本郵船会社員の息子であり、また３名の記載は重複と判断されるので、合計は198名となる。198名の名簿に記載された情報は、表１の通りである。

次に勤惰表に名前が見出される人物はごくわずかで、表２の通り７名に過ぎない。ほかに、入社帳には記載がないが朝鮮人の可能性がある人物として、たとえば「安重楽」という名前が明治30年１月から明治31年４月までの４学期間見いだせる。日本でも「安　やす」という姓は存在し、また「安重」を姓だと考えれば、日本人の可能性もあるが、「重楽」「楽」という名前の可能性を考えると、留学生の可能性も残る。今後、勤惰表を細かく検討していくことで、他にも可能性のある人物名を見出すことができるかもしれない[6]。

２）明治17年までの留学生

最初の留学生である兪吉濬は、その後アメリカにも留学し、政府の要職を務め、内部大臣として科挙制度の廃止、断髪令の実施等を担当した。彼については、韓国でも日本においても多くの研究がなされ、本人の著作も『兪吉濬全書』全５巻（一潮閣、1971年）としてまとめられている。一方柳定秀の生涯は、あまり明らかになってはいない。明治14年６月13日付の『郵便報知新聞』には、２人が熱心に日本語を習得しようとする姿が紹介されている。

翌明治15年に金玉均が来日し福沢との間で交流が深まると、先に述べたように16年より60名程の留学生が入学した。その中には、のちに朝鮮に対する外国の干渉を排除すべく活動した「独立協会」の顧問となる、独立運動家の徐載弼も含まれている。彼らの生活や学習に関する諸事を担当したのは、福沢の縁戚であった飯田三治であった。当時の福沢の書簡によれば、まず日本語の教育を行い、続いて慶應義塾だけではなく、陸軍戸山学校（歩兵の教官養成）や農学校に学び、横浜税関や逓信省などで実務研修を行った[7]。しかし親清派と親日派間での軋轢など、朝鮮国内の政治体制は安定的とはいえず、それは少なからず日本にいる間から留学生たちの生活に影響を及ぼすことになった[8]。

明治16、17年の留学生で、入社帳に記録がある人物は、金漢琦・金益昇・安寧洙の３名である。彼らは勤惰表の記録も残っている（表３―１）。金漢琦は予科の番外から科外、金益昇および安寧洙は予科の番外に在籍した。「番外」は明治14年12月に定められた学則で制定されている。当時の学科課程は、修学年限３年の本科と特に年限を定めない予科が設けられ、本科には１等から４等、予科には１番から４番および番外が設けられた。番外では、初級の英語や地理学・窮理（物理）学の初歩を学び、修学年限は定められていないが、予科全体でおよそ２年程度の就学を見込んでいたようである。「科外」も初学者向けの課程である。

慶應義塾は当初より、さまざまな年齢、さまざまな習熟度の学生が学んでいた。そこで明治６年に正則科と変則科が設けられた。正則科は年限が定められ（７年のち５年に変更）、カリキュラムに従い文法・地理・窮理（物理）などに関する基礎的な英書から学んだ。これに対し変則科は、17歳以上を対象に「読方ト訳」を学ぶことが中心であった。特に修学年限は定められず、能力別に等級を分け、毎日２時間ないし３時間の授業を行った。一般的には「正則」は会話を、「変則」は訓読解意を学ぶことを意味したが、慶應義塾での区別は異なっている。この変則科が、明治10年から「科外」の名称になり、対象者も20歳以上となった。ただし、日本人学生に対しても年齢制限は厳格に守られていたわけではない。

朝鮮からの留学生は科挙制度もあって、日本人学生よりも十分に儒学の素養があり、「読方ト訳」だけを学ぶ課程の学生とともに学んだのではないかと推測される[9]。

勤惰表で成績が記載されている科目が、金漢琦は明治16年９月～12月期が「読方小試験、作文、読方大試験」、17年５月～７月期が「読方大試験」であり（17年１月～４月期は点数の記入がない）、金益昇は「読方小試験、読方大試験」、安寧洙は「読方小試験」であることが、上記を裏付けている。

この３名と同時期に入学した多くの学生については、前述のように詳細はわからない。

表１

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
1	金	漢琦	朝鮮	京城北村安洞					
2	安	寧洙	朝鮮国	京城桂洞居					
3	金	益昇	朝鮮国	京城壮洞居					
4	尹	致旿	朝鮮	京城観光坊松峴通	訓大夫殿中御史子		尹英烈	子	明治２年
5	魚	允廸	朝鮮	京畿道豊徳府蓮洞里			魚昌	子	明治元年
6	朴	羲秉	朝鮮国	漢城廟洞	外務衙門主事				明治4年７月
7	金	鳳錫	朝鮮国	京城草洞			金景臨	長男	明治14年
8	申	海永	朝鮮国	京畿道利川郡徳坪里			申一善	次男	
9	厳	柱一	朝鮮国	京畿道利川郡道波			厳臣永	六男	
10	劉	昌熙	朝鮮国	京城中部詩谷			劉敦相	次男	
11	尹	基周	朝鮮国	京城中部琶谷		戸主			
12	羅	鎬	朝鮮国	京城西部社洞			羅敬煥	長孫	
13	韓	萬源	朝鮮国	京城西部毛橋			韓鎮容	長男	
14	林	炳亀	朝鮮国	京城南部南洞			林漢相	次男	
15	林	浚相	朝鮮国	京城北部校洞			林徽洙	次男	
16	朴	叙陽	朝鮮国	京城西部確橋			朴斉斌	長男	
17	金	重漢	朝鮮国	京城南部犂洞			金嘉鎮	長男	
18	金	鎔済	朝鮮国	京城南部犂洞			金冕奎	長男	
19	李	儒哲	朝鮮国	京畿道水原府上箭村		戸主			
20	鄭	在淳	朝鮮国	京城南部犂洞			鄭在倫	弟	
21	李	宜恂	朝鮮国	京畿抱川県屯基			李応益	長男	
22	権	鳳洙	朝鮮国	京畿道利川郡松谷里			権鍾殷	長男	
23	朴	完緒	朝鮮国	京城北部小安洞			朴泳好	長男	
24	崔	永植	朝鮮国	京城西部五官洞			崔俊成	三男	
25	金	教先	朝鮮国	京城西部社洞			金孝熙	長男	

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
当20年	飯田三治		明治16	9		本人姓名に「キンバンキ」と振り仮名あり	Ⅲ51	15	
18年			明治17	10	7		Ⅲ119	17	
25年			明治17	10	7		Ⅲ119	17	
	福沢諭吉		明治27	11			Ⅳ375	27	
	福沢諭吉		明治27	11			Ⅳ375	27	
	山崎英夫	麹町区中六番町49番地	明治28	3			Ⅳ385	27	
	山崎英夫	麹町区中六番町朝鮮公使館	明治28	5			Ⅳ389	27	
年26			明治28	5			Ⅳ402	27	
年25			明治28	5			Ⅳ402	27	
年22			明治28	5			Ⅳ402	27	
年21			明治28	5			Ⅳ402	27	
年20			明治28	5			Ⅳ402	27	
年20			明治28	5			Ⅳ402	27	
年18			明治28	5			Ⅳ402	27	
年16			明治28	5			Ⅳ403	27	
年21			明治28	5			Ⅳ403	27	
年16			明治28	5			Ⅳ403	27	
年27			明治28	5			Ⅳ403	27	
年24			明治28	5			Ⅳ403	27	
年25			明治28	5			Ⅳ403	27	F8-F13-19
年25			明治28	5			Ⅳ403	27	
年24			明治28	5			Ⅳ403	27	
年18			明治28	5			Ⅳ404	27	
年17			明治28	5			Ⅳ404	27	
年16			明治28	5			Ⅳ404	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
27	鄭	海英	朝鮮国	京城中部塔洞			鄭錫圭	長男	
26	洪	仁杓	朝鮮国	京城北部東十字橋			洪淳義	長男	
28	魚	璐善	朝鮮国	京城西部半泉		戸主			
29	兪	承兼	朝鮮国	京城北部桂洞			兪昌兼	弟	
30	張	浩翼	朝鮮国	忠清道清安邑内面鷲川里村			張晋錫	次男	
31	魚	潭	朝鮮国	京畿道広州府高徳里			魚竜善	長男	
32	兪	鎮方	朝鮮国	京畿道広州山谷			兪致黙	長男	
33	兪	致悳	朝鮮国	京畿道広州府玄橋			兪致常	弟	
34	金	圭福	朝鮮国	京城西部水橋		戸主			
35	兪	致学	朝鮮国	京畿道広州府開芝洞			兪胤煥	長男	
36	申	佑善	朝鮮国	京畿道高陽県沙里洞			申錫朝	長男	
37	金	東完	朝鮮国	京城西部門外東洞西部契		戸主			明治14年１月
38	李	喜轍	朝鮮国	京城西部車洞			李容万	長男	
39	南	舜熙	朝鮮国	京畿道長湍郡津県内			南廷宗	長男	
40	尹	世鏞	朝鮮国	京畿道江華府文山洞			尹起東	長男	
41	崔	奎福	朝鮮国	京城南部苧洞		戸主			
42	李	殷相	朝鮮国	京城南部仁峴			李炳薫	長男	
43	姜	竜甲	朝鮮国	慶尚道宜寧県府内			姜慶燦	次男	
44	呉	在喆	朝鮮国	京城南部竜洞			呉然离	次男	
45	慎	俊成	朝鮮国	京城南部河橋			慎済達	長男	
46	権	承禄	朝鮮国	京城南部履洞			権溶鎮	長男	

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年15			明治28	5			Ⅳ404	27	
年15			明治28	5			Ⅳ404	27	
年25			明治28	5			Ⅳ404	27	
年20			明治28	5			Ⅳ404	27	
年25			明治28	5			Ⅳ404	27	
年15			明治28	5			Ⅳ405	27	
年16			明治28	5			Ⅳ405	27	
年21			明治28	5			Ⅳ405	27	
年16			明治28	5			Ⅳ405	27	
年19			明治28	5			Ⅳ405	27	
年23			明治28	5			Ⅳ405	27	
			明治28	5		・本人年齢に「年16」とあるが墨書抹消。 ・欄外に「34年５月　除名（フ、５）」	Ⅳ405	27	
年25			明治28	5			Ⅳ405	27	F8-D03-20
年23			明治28	5			Ⅳ406	27	
年23			明治28	5			Ⅳ406	27	
年23			明治28	5			Ⅳ406	27	
年18			明治28	5			Ⅳ406	27	
年19			明治28	5			Ⅳ406	27	
年18			明治28	5			Ⅳ406	27	
年18			明治28	5			Ⅳ406	27	
年18			明治28	5			Ⅳ406	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
47	呉	世儀	朝鮮国	京城中部笠洞			呉慶喜	長男	
48	李	瑾相	朝鮮国	京城中部笠洞			李能相	次弟	
49	崔	相敦	朝鮮国	京城南部美洞			崔万源	長男	
50	趙	斉桓	朝鮮国	京城南部苧洞			趙漢昇	長男	
51	康	永祐	朝鮮国	京城南部美洞		戸主			
52	金	星圭	朝鮮国	京城南部詩洞			金瑾炯	三次男	
53	金	鴻南	朝鮮国	京城南部明洞			金鳳南	弟	
54	劉	文相	朝鮮国	京城南部詩洞		戸主			
55	卞	志琓	朝鮮国	京城南部詩洞			卞観植	次男	
56	李	喆宇	朝鮮国	京城中部漢洞			李会来	長子	
57	白	轍洙	朝鮮国	全羅道雲峰県阿谷			白馨洙	第三弟	
58	王	瑾植	朝鮮国	京城東部安巖洞			王済膺	三男	
59	李	周煥	朝鮮国	江原道麟蹄県北里			李源鐘	長男	
60	趙	文元	朝鮮国	京城南部青橋			趙慶相	長男	
61	張	承斗	朝鮮国	京城東部壺洞			張錫奎	長男	
62	李	冕宇	朝鮮国	京城中部漢洞			李会来	次男	
63	李	熙峻	朝鮮国	京城中部漢洞			李兢懋	長男	
64	李	時懋	朝鮮国	京城南部草洞			李一溶	長男	
65	李	興俊	朝鮮国	京城南門外万里峴			李興福	四弟	
66	安	衡中	朝鮮国	京城南部詩谷			安瑾中	次弟	
67	金	明集	朝鮮国	京城中部琶谷			金演	長男	
68	金	允求	朝鮮国	京城南部犂洞			金善済	二男	
69	黄	祐悳	朝鮮国	京城北部桂洞			黄翰周	長男	
70	呉	亨根	朝鮮国	京城南部犂洞			呉元泳	長男	
71	黄	祐璿	朝鮮国	京城北部安洞			黄憲周	次男	
72	朴	正善	朝鮮国	京城南部履洞			朴在慶	長男	
73	尹	邦鉉	朝鮮国	京城北部桂洞			尹喆圭	長男	
74	趙	元奎	朝鮮国	京城北部小安洞			趙性協	長男	
75	張	台煥	朝鮮国	京城西部黄井洞			張惇根	長男	
76	趙	東赫	朝鮮国	京城敦義門外石橋			趙泰夏	長男	
77	池	承浚	朝鮮国	京城西部禁橋			池胤錫	次男	
78	劉	鎮世	朝鮮国	京城中部貞善坊			劉仁赫	次男	
79	張	奎煥	朝鮮国	京城西部杜洞			張佑根	次男	
80	金	淳恒	朝鮮国	京城西部黄井洞			金鳳錫	次男	

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年25			明治28	5			Ⅳ407	27	
年24			明治28	5			Ⅳ407	27	
年24			明治28	5			Ⅳ407	27	
年24			明治28	5			Ⅳ407	27	
年23			明治28	5			Ⅳ407	27	
年22			明治28	5			Ⅳ407	27	
年21			明治28	5			Ⅳ407	27	
年20			明治28	5			Ⅳ407	27	
年16			明治28	5			Ⅳ408	27	
年26			明治28	5			Ⅳ408	27	
年25			明治28	5			Ⅳ408	27	
年24			明治28	5			Ⅳ408	27	
年24			明治28	5			Ⅳ408	27	
年20			明治28	5			Ⅳ408	27	
年19			明治28	5			Ⅳ408	27	
年19			明治28	5			Ⅳ408	27	
年17			明治28	5			Ⅳ409	27	
年19			明治28	5			Ⅳ409	27	
年21			明治28	5			Ⅳ409	27	
年25			明治28	5			Ⅳ409	27	F8-D03-05
年24			明治28	5			Ⅳ409	27	
年25			明治28	5			Ⅳ409	27	F8-D03-12
年23			明治28	5			Ⅳ409	27	
年21			明治28	5			Ⅳ409	27	
年17			明治28	5			Ⅳ410	27	
年22			明治28	5			Ⅳ410	27	
年18			明治28	5			Ⅳ410	27	F8-D03-24
年22			明治28	5			Ⅳ410	27	
年25			明治28	5			Ⅳ410	27	
年23			明治28	5			Ⅳ410	27	
年21			明治28	5			Ⅳ410	27	
年21			明治28	5			Ⅳ410	27	
年20			明治28	5			Ⅳ411	27	
年19			明治28	5			Ⅳ411	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
81	朴	道秉	朝鮮国	京城南部草洞			朴承奭	長男	
82	金	敬済	朝鮮国	京城中部漢洞			金商淳	次男	
83	李	範鶴	朝鮮国	京城中部冨泉			李能夏	三男	
84	安	禎植	朝鮮国	京畿道広州府祥林		戸主			
85	李	玄載	朝鮮国	京畿道楊根郡葛尾			李容華	次男	
86	李	正熙	朝鮮国	平安道粛川郡東山台			李寅栻	長男	
87	安	昌善	朝鮮国	京畿道陽智県鳳村		戸主			
88	尹	泰凡	朝鮮国	忠清道公州郡新上維鳩			尹鳳鉉	長男	
89	李	鐘華	朝鮮国	京城内南部鋳洞			李圭益	長男	
90	金	亨燮	朝鮮国	平安道粛川郡坪里			金橓成	長男	
91	李	敬承	朝鮮国	忠清道鎮川県府内			李鐘彬	次男	
92	張	憲植	朝鮮国	京畿竜仁県梅陵里			張成汲	長男	
93	洪	彦杓	朝鮮国	京城南部筆洞			洪淳益	長男	
94	金	憲植	朝鮮国	京畿道広州府都尺面		戸主			
95	鄭	寅昭	朝鮮国	京畿道安山郡牧巌里			鄭薫朝	長男	
96	李	範壽	朝鮮国	忠清道堤川県道峙里			李琬器	三男	
97	任	徹宰	朝鮮国	京城南部後渓洞			任栄鎬	次男	
98	趙	學熙	朝鮮国	京城北部帯洞			趙秉老	五男	
99	孫	万秀	朝鮮国	忠清道沃川郡陽山里			孫世爀	三男	
100	林	惠相	朝鮮国	京城南部孝橋			林翰洙	四男	
101	張	明根	朝鮮国	京畿道高陽郡求知道			張日根	次弟	
102	金	大熙	朝鮮国	京畿道果川県新分村			金奭集	長男	
103	李	在夏	朝鮮国	京畿道抱川県花山面			李寅元	長男	

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年20			明治28	5			Ⅳ411	27	
年18			明治28	5			Ⅳ411	27	
年18			明治28	5			Ⅳ411	27	
年26			明治28	5			Ⅳ411	27	
年18			明治28	5			Ⅳ411	27	
年25			明治28	5			Ⅳ411	27	
年25			明治28	5			Ⅳ412	27	
年25			明治28	5			Ⅳ412	27	
年25			明治28	5			Ⅳ412	27	F8-D03-18
年18			明治28	5			Ⅳ412	27	
年24			明治28	5			Ⅳ412	27	
年25			明治28	5			Ⅳ412	27	
年23			明治28	5			Ⅳ412	27	
年26			明治28	5			Ⅳ412	27	
年22			明治28	5			Ⅳ413	27	F8-D03-16
年23			明治28	5			Ⅳ413	27	
年16			明治28	5			Ⅳ413	27	
年22			明治28	5			Ⅳ413	27	
年17			明治28	5			Ⅳ413	27	
年18			明治28	5			Ⅳ413	27	
年23			明治28	5			Ⅳ413	27	
年17			明治28	5			Ⅳ413	27	
年25			明治28	5			Ⅳ414	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
104	徐	丙吉	朝鮮国	京城中部翼洞			徐丙善	三弟	
105	朴	炳憲	朝鮮国	京城南部壮洞			朴馨来	長男	
106	玄	学圭	朝鮮国	咸鏡道明川郡下加里			玄錫俊	長男	
107	金	基璋	朝鮮国	咸鏡道端川郡校洞			金鍾祐	四男	
108	徐	丙武	朝鮮国	京城南部后洞			徐相黙	長男	
109	尹	九善	朝鮮国	京城南部畜洞			尹致鳳	長男	
110	全	泰興	朝鮮国	京城南部后洞			全禹錫	第二男	
111	金	教興	朝鮮国	京城西部紫岩			金世熙	長男	
112	呉	胄泳	朝鮮国	京城南部草洞		戸主			
113	方	漢粛	朝鮮国	京城中部長橋			方漢徳	季弟	
114	洪	承復	朝鮮国	京城南部后洞			洪祐享	長男	
115	呂	炳鉉	朝鮮国	黄海道鳳山郡舎人面			呂圭根	長男	
116	金	寛鉉	朝鮮国	京畿道水原府玉吉里			金在喜	三男	
117	張	東煥	朝鮮国	京城崇礼門外孔湖			張源植	長男	
118	李	漢応	朝鮮国	京城南部筆洞			李漢肯	弟	
119	李	源昇	朝鮮国	京城南部鐘峴			李尚鎮	次男	
120	鄭	錫煥	朝鮮国	京畿道広州府内			鄭采圭	次男	
121	金	世泰	朝鮮国	京畿道楊州郡広津			金百錬	次男	
122	韓	震用	朝鮮国	咸鏡道定平郡佳村			韓錫琫	長男	
123	朴	晩緒	朝鮮国	忠清道公州郡豊洞			朴遠緒	長弟	
124	金	益南	朝鮮国	京城南部草洞			金在善	長男	
125	全	万基	朝鮮国	京城南部棗洞			全恒基	四弟	
126	禹	泰鼎	朝鮮国	黄海道平山郡方洞			禹宰栄	長男	
127	金	正壎	朝鮮国	慶尚道金海郡茶田			金時鏞	長男	
128	朴	廷秀	朝鮮国	慶尚道金海郡桃洞		戸主			
129	廉	学雨	朝鮮国	江原道金化県中里			廉錫載	長子	

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年22			明治28	5			Ⅳ414	27	
年24			明治28	5			Ⅳ414	27	
年25			明治28	5			Ⅳ414	27	F8-D03-13
年24			明治28	5			Ⅳ414	27	F8-D03-06
年16			明治28	5			Ⅳ414	27	
年18			明治28	5			Ⅳ414	27	
年27			明治28	5			Ⅳ414	27	F8-D03-21
年22			明治28	5			Ⅳ415	27	
年23			明治28	5			Ⅳ415	27	
年22			明治28	5			Ⅳ415	27	
年21			明治28	5			Ⅳ415	27	F8-D03-08
年25			明治28	5			Ⅳ415	27	
年21			明治28	5			Ⅳ415	27	F8-D03-11
年21			明治28	5			Ⅳ415	27	
年20			明治28	5			Ⅳ415	27	
年20			明治28	5			Ⅳ416	27	
年24			明治28	5			Ⅳ416	27	
年25			明治28	6			Ⅳ416	27	
年20			明治28	6			Ⅳ416	27	F8-D03-09
年17			明治28	6			Ⅳ416	27	
年25			明治28	6			Ⅳ416	27	F8-D03-17
年25			明治28	6			Ⅳ416	27	
年22			明治28	6			Ⅳ416	27	
年24			明治28	6			Ⅳ417	27	F8-D03-22
年25			明治28	6			Ⅳ417	27	F8-D03-19
年23			明治28	6			Ⅳ417	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
130	安	慶善	朝鮮国	京畿道陽智県鳳村			安聖善	次弟	
131	金	羲善	朝鮮国	平安洞甑山県竜徳里			金鎮喬	三男	
132	権	定鎮	朝鮮国	京城南部草洞			権在斗	四男	
133	玄	槶	朝鮮国	京畿道楊州郡杭村		戸主			
134	金	洛熌	朝鮮国	忠清道韓山郡種洞			金錬	長男	
135	金	東圭	朝鮮国	京城南部典谷			金瑩洙	長男	
136	陳	熙星	朝鮮国	京城南部棗洞			陳英	四男	
137	韓	鳳羲	朝鮮国	平安道平壌府府下			韓用旗	長男	
138	盧	景輔	朝鮮国	黄海道豊川郡桐谷			盧信輔	三弟	
139	張	源植	朝鮮国	京城高澗洞			張徳潤	長男	
140	崔	炳台	朝鮮国	京畿道麻田郡声谷洞			崔景模	長男	
141	李	熙璡	朝鮮国	京城南部仁峴		戸主			
142	卞	河璡	朝鮮国	慶尚道蔚山郡路上			卞度銓	長男	
143	呉	聖模	朝鮮国	平安道平壌府亜営洞			呉俊泳	長男	
144	朴	正銑	朝鮮国	京城南部詩洞			朴教熒	長男	
145	金	鴻鎮	朝鮮国	平安道平壌府燁洞		戸主			
146	朴	潤陽	朝鮮国	京城南部筆洞		戸主			
147	安	明善	朝鮮国	京畿道陽智県鳳村	士族		安稷寿	長男	
148	曹	秉柱	朝鮮国	京城南部倉洞	士族	戸主			
149	徐	廷岳	朝鮮国	京城北部桂洞	士族		徐丙達	長男	
150	李	厦栄	朝鮮国	江原道平康県鴨洞	士族	戸主			
151	閔	泳喆	朝鮮国	京城					
152	李	垠鎔	朝鮮国	京城					
153	閔	泳敦	朝鮮国	京城					
154	李	載現	朝鮮国	京城					
155	尹	斗炳	朝鮮国	京城					

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年22			明治28	6			Ⅳ417	27	
年20			明治28	6			Ⅳ417	27	
年19			明治28	6			Ⅳ417	27	
年22			明治28	6			Ⅳ417	27	
年25			明治28	6			Ⅳ417	27	F8-D03-02
年25			明治28	6			Ⅳ418	27	
年24			明治28	6			Ⅳ418	27	F8-D03-04
年22			明治28	6			Ⅳ418	27	
年22			明治28	6			Ⅳ418	27	
年24			明治28	6			Ⅳ418	27	
年25			明治28	6			Ⅳ418	27	
年25			明治28	6			Ⅳ418	27	
年20			明治28	6			Ⅳ418	27	
年24			明治28	6			Ⅳ419	27	
年25			明治28	6			Ⅳ419	27	
年23			明治28	6			Ⅳ419	27	
年24			明治28	6			Ⅳ419	27	
年17			明治28	8			Ⅳ419	27	
年26			明治28	7			Ⅳ419	27	
年22			明治28	7			Ⅳ419	27	
年28			明治28	7			Ⅳ420	27	
32年			明治28	9			Ⅳ429	27	
年26			明治28	9			Ⅳ429	27	
年33			明治28	9			Ⅳ429	27	
年26			明治28	9			Ⅳ429	27	
年26			明治28	9			Ⅳ430	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
156	尹	喬栄	朝鮮国	京城					
157	尹	徳栄	朝鮮国	京城					
158	朴	勝驪	朝鮮国	京城					
159	趙	漢元	朝鮮国	京城					
160	李	圭桓	朝鮮国	京城					
161	趙	秉哲	朝鮮国	京城					
162	李	鳳魯	朝鮮国	京城					
163	李	準栄	朝鮮国	京城					
164	閔	弼鎬	朝鮮国	京城					
165	鄭	秉漢	朝鮮国	京城					
166	李	秉秀	朝鮮国	京城					
167	尹	元求	朝鮮国	京城					
168	徐	光運	朝鮮国	京城					
169	姜	泰膺	朝鮮国	京城					
170	金	斗鉉	朝鮮国	京城					
171	金	相冀	朝鮮国	京城					
172	秦	明学	朝鮮国	京城					
173	崔	鳳植	朝鮮国	京城					
174	李	興均	朝鮮国	京城					
175	李	東錫	朝鮮国	京城					
176	姜	文秀	朝鮮国	京城					
177	洪	秉晋	朝鮮国	京城					
178	朴	溥瑛	朝鮮国	京城					
179	兪	鎮河	朝鮮国	京城					
180	張	聖均	朝鮮国	京城					
181	金	順培	朝鮮国	京城					
182	金	在赫	朝鮮国	京城					
183	朴	荘和	朝鮮国	京畿道漢城北部斉洞			朴準禹	長男	
184	金	鼎禹	朝鮮国	京畿道広州府鶴峴里	士族	戸主			
185	權	浩善	朝鮮国	忠清道温陽郡左部洞	士族	戸主			
186	林	在徳	朝鮮国	忠清道天安郡新村	士族		林儀栄	長男	
187	李	憲珪	朝鮮国	京城西部冶洞	士族		李仁植	第四男	
188	金	錫胤	朝鮮国	京城東部蓮洞	士族	戸主			

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年36			明治28	9			Ⅳ430	27	
年25			明治28	9			Ⅳ430	27	
年29			明治28	9			Ⅳ430	27	
年28			明治28	9			Ⅳ430	27	
年37			明治28	9			Ⅳ430	27	
年34			明治28	9			Ⅳ430	27	
年27			明治28	9			Ⅳ430	27	
年35			明治28	9			Ⅳ431	27	
年34			明治28	9			Ⅳ431	27	
年30			明治28	9			Ⅳ431	27	
年25			明治28	9			Ⅳ431	27	
年27			明治28	9			Ⅳ431	27	
年24			明治28	9			Ⅳ431	27	
年27			明治28	9			Ⅳ431	27	
年28			明治28	9			Ⅳ431	27	
年26			明治28	9			Ⅳ432	27	
年31			明治28	9			Ⅳ432	27	
年31			明治28	9			Ⅳ432	27	
年23			明治28	9			Ⅳ432	27	
年23			明治28	9			Ⅳ432	27	
年18			明治28	9			Ⅳ432	27	
年26			明治28	9			Ⅳ432	27	
年29			明治28	9			Ⅳ432	27	
年23			明治28	9			Ⅳ433	27	
年25			明治28	9			Ⅳ433	27	
年25			明治28	9			Ⅳ433	27	
年29			明治28	9			Ⅳ433	27	
年23			明治28	9			Ⅳ433	27	
年35			明治28	11	21		Ⅳ434	27	
年24			明治28	11			Ⅳ434	27	
年26			明治28	11			Ⅳ434	27	
年28			明治28	11			Ⅳ434	27	
年30			明治28	11			Ⅳ434	27	

表１（続き）

通番	姓	名	国名	住所	身分	戸主	父兄氏名	間柄	生年月
189	鄭	殷模	朝鮮国	慶尚道機張県亀漢洞	士族		鄭寅浩	二男	
190	李	圭三	朝鮮国	京城／京城中部美洞	士族		李夏栄	長男	
191	元	応常	朝鮮国	忠清道温陽郡葛山里	士族		元世亨	長男	
192	尹	致晟	朝鮮国	京城中部典洞	士族		尹英烈	第三男	
193	兪	致奎	朝鮮国	京城／忠清道洪州郡江村	士族		兪致邦	弟	
194	金	慶植	朝鮮国	京畿道広州府鶴峴里			金鼎禹	長男	
195	朴	正和	朝鮮国	京畿道漢城北部斉洞			朴準禹	次男	
196	河	相驥	朝鮮	京城西部大貞洞柳植井			河錫泓		
197	金	蘭史	朝鮮	京城西部大貞洞柳植井					
198	崔	万淳	大朝鮮国	京城典洞	士族		崔鉉任	次子	

表２

学期	記載のある人物						
1883年９～12月（第３学期）	金漢琦						
1884年１～４月（第１学期）	金漢琦						
1884年５～７月（第２学期）	金漢琦						
1884年９～12月（第３学期）		金益昇	安寧洙				
—							
1894年９～12月（第３学期）				魚允廸	尹致旿		
1895年１～４月（第１学期）						朴義秉	
1895年５～７月（第２学期）						朴義秉	
—							
1897年１～４月（第１学期）							金東完
1897年５～７月（第２学期）							金東完
1897年９～12月（第３学期）							金東完
1898年１～４月（第３学期）							金東完

年齢	保証人	保証人住所	入社年	月	日	備考	復刻版頁	入社帳	
年18			明治28	11		433頁は欄全体が斜線で墨書抹消	Ⅳ434	27	
年18			明治28	9/11		433頁は欄全体が斜線で墨書抹消	Ⅳ433/434	27	
年27			明治28	11			Ⅳ434	27	
年19			明治28	11			Ⅳ435	27	
年25／27			明治28	9/11		433頁は欄全体が斜線で墨書抹消	Ⅳ433/435	27	
年15			明治28	11			Ⅳ442	27	
年15			明治28	11			Ⅳ442	27	
年41			明治28	10			Ⅳ454	27	
年23			明治28	10			Ⅳ454	27	
年24			明治29	1			Ⅳ459	27	

右端の欄は、『マイクロフィルム版福沢関係文書』（雄松堂フィルム出版、1989～1998年）に収録されている、その人物に関する資料の分類番号である。

表３―１

学期	記載のある人物					
1883年９～12月（第３学期）	金漢琦	予科／番外ノ二				
1884年１～４月（第１学期）	金漢琦	科外／級外				
1884年５～７月（第２学期）	金漢琦	科外／級外				
1884年９～12月（第３学期）			金益昇	番外（登級）	安寧洙	番外

３）明治27年11月および28年３月の留学生

明治17年12月の甲申政変のあと、清の強い影響力のもとで、高宗による相対的にみれば安定した政治が行われていた時期には、当然のことながら日本への留学は検討されなかった。明治27年になって日清戦争勃発の影響

表３―２

学期	記載のある人物							
1894年９～12月（第３学期）	魚允廸	予科／八番／乙組	尹致旿	予科／八番／乙組				
1895年１～４月（第１学期）					朴義秉	予科／八番／乙組（及第）		
1895年５～７月（第２学期）					朴義秉	予科／八番／甲組		
―								
1897年１～４月（第１学期）							金東完	普通科／四等ノ二期（及第）
1897年５～７月（第２学期）							金東完	普通科／四等ノ三期
1897年９～12月（第３学期）							金東完	普通科／四等ノ三期
1898年１～４月（第３学期）							金東完	普通科／四等／C（及第）

により、金弘集が総理大臣に就任し、政権の中心が高宗から軍国機務処に移ると、甲午改革が開始された。９月には平壌で日本軍が勝利を収め、10月には井上馨が全権大使として京城に派遣された。その謁見の折、井上が高宗に提示した20か条の改革要領の中には、「留学生を日本に派遣する事」の１条が含まれていた[10]。すでに慶應義塾が想定されての提言であったかは定かではないが、11月には福沢諭吉を保証人として尹致旿・魚允廸の２名が、翌28年３月には朝鮮公使館通訳山崎英夫を保証人として、朴義秉が入塾している（表１）。

彼らにも勤惰表の記録（表３―２）があり、いずれも「予科八番」で学んでいる。慶應義塾は、明治23年に高等教育課程として大学部を設置したのち、幼稚舎（初等教育課程）・普通部（中等教育課程）・大学部の体制となった。予科は、その普通部に設けられていた。１番から８番までに分かれ、８学期間（２年８か月）が修業の目安とされた。予科在学者の成績は通常「漢書」「語学」「訳読」について記載されているが、尹致旿と魚允廸は「語学」「訳読」であり、朴義秉も成績の記載は明治28年１月～４月期の「語学」のみである。後述するように朝鮮人学生に対しては別途学則を定める予定で、一般学生とは別のカリキュラムで学ぶ機会も多かったのであろう。特に漢書は、前述のように実力差があったと考えられる。

４）明治28年５月の留学生

明治28年５月になると、114名が慶應義塾に入学する。そのひとり兪致衡（表１では兪致学）は、慶應義塾留学中の日記を残している[11]。同人が最初に日本に留学生を送る話を聞いたのは、開国503年（明治27年）旧暦11月のことであった。偶然ソウルで「東遊」の話を聞き、勧めてくれる友人もいたし、自分も一度行ってみようかと考えて、故郷の広州へ戻って話をしたところ、みなの反応から行けるかどうか判断するのはむずかしく、決定できずにそのままにしていた。しかし翌28年２月になって、再び留学の話を聞き、やはり日本に行って勉強をしたいという気持ちが起こって、すぐにソウルで内務大臣に会おうと出かけたが、選考の日がまだわからなかった。待っているわけにもいかないので、連絡をくれるように頼んで一旦家に戻っていたところ、３月15日に通知が来て翌日「日本へ行く学徒の看品」があるというので、大急ぎで仕度をして3、4人の友人と出発した。同じ本貫杞渓兪氏の兪吉濬のところへ挨拶に寄ったら、すでに10余人の学徒が来ていて、遅かったことをたしなめられたので、あわてて内務府に出かけていくと、内務大臣以下すべての官員が揃っていて、また学生「数百人」が集まって府中はいっぱいになっていた。日本から来た医師による検査があり、その日は時間がなくすべての試験は実施されず、翌日才芸や文筆の試験があった。結局応募した学生200余名中、「気品」の「清濁」と「気骨」の「準秀」により123名が合格した。合格者は宣誓書を作り、仁川までの交通費として１人あたり「大銀二圜」が支給され、「学務」で大臣の訓戒を聞いた。その後も、23日には本府の協弁と内務大臣、政府都憲が座り、主事たちが整列する前で、他国へ行き「修身の習と行道の法」を学ぶので、「行動挙止と一動一静」について１人ずつ何度も訓戒があり、25日には内務に全員が集められ、本府協弁が司会堂大庁に立ち、１人ずつ前に立たされ、８人が選ばれて学務大臣の警表（訓示書）を授与された。

３月26日（陽暦４月20日）にマポから川を下って仁川まで行き、仁川からは英国船に乗った。一行は長崎経由で神戸に到着、神戸からは汽車で東京に向かった。陽暦５月１日に新橋駅に到着し、翌２日付の『時事新報』によると、新橋駅では慶應義塾の学生および幼稚舎生徒200余名が出迎え、朝鮮国国旗と「大朝鮮国諸生同窓学会」の旗のもと慶應義塾まで行進し、三田演説館で福沢諭吉の演説（日記によれば「万国開化」）を聞いたあと、寄宿舎に入った。慶應義塾には、この日に撮影したと思われる集合写真が

残っており、裏面には名前が記されている。すでに留学していた尹致旿・魚允廸・朴羲秉のほか若干名が洋装だが、あとは韓服で冠をつけ、新聞には「(朝鮮服の色は）青・白・緑等一様ならず」と書かれている。

『慶應義塾百年史』によれば、慶應義塾では朝鮮留学生学則を定めたが、残念ながら現在は内容がわからない[12]。入学時の留学生たちの年齢は表４の通りである。兪致衡の日記によれば、５月６日（旧暦４月12日）午後に講堂に集められ、朝鮮にいる間にすでに日本語を習っていた人とそうでいない人では実力差があり、試験で甲乙丙丁４つの級に分けられた。兪は丁級で、翌７日に「初めて就学し、諺文（日本仮名）を習う」とある。兪の日記には、物理や化学も学び実験も見たことが書かれている（閏５月初７日条、閏５月28日条)。

留学生たちが日本での生活を始めて２ヶ月ほどの間に、朝鮮では政局が二転していた。内閣内の対立により、甲午改革を進めていくはずであった金弘集内閣は５月31日に総辞職に追い込まれ、代わって政府の実権を握ったのは朴泳孝であった。しかし三国干渉の結果日本が遼東半島の還付を決め、対韓不干渉政策によって特派全権大使の井上馨が６月６日帰国すると、親日派であった朴泳孝は後ろ盾を失い、親衛隊の交代を巡る問題で７月６日には反逆罪で逮捕状が出され、日本に亡命を余儀なくされた。

このとき福沢が朴泳孝を自宅に匿ったことで、留学生の間に反発が生じることになった。日本の新聞（『国民新聞』）が、朝鮮の公使高永喜と韓国留学生一同が朴泳孝を出迎え、演説を聞いて慷慨し涙を流すものまであったと報じたことで、問題が起こった。７月24日（旧暦６月３日）に留学生たちは「塾場」に集まり、そのうちのひとり金憲植が、自分たちが親戚を捨て遙か遠くまで来て学んでいるのは「忠国愛国」のためである、「本事」はわからなくとも朴泳孝は政府の命令に反逆する陰謀が発覚し亡命した人物で、自分たちが「福沢の訓誡」を受けている場所で、福沢が反逆者を匿うことは「大義」に関わることであり、自分たちが業を終えても後日必ず「進用」を受けることができなくなる明日より「廃学」し、学部からの「答報」を何か月かかっても待つべきであると演説し、学生みなが賛成した。福沢や公使館の説得もあって４日間で学業に戻ったが、その影響を心配しながら夏休みに入ることになった。

朴泳孝の失脚を受けてか、７月19日になると福沢が主宰していた『時事新報』は「朝鮮人を教育風化すべし」と題する社説を掲げ、現在100余名

しかいない留学生の数を1,000人以上に増やすために、日本政府が費用を負担すべきであると主張した。８月６日には、再び公使として着任した井上馨が朝鮮政府に対して日本への留学を勧め、17、8歳以上は「速成生徒」として、日本語の会話力が得られれば官省・地方庁・裁判所などで実務研修を行い、他方17、8歳以下には「実学」を十分に学ぶ機会を作り、中学から大学、専門教育へと進ませるべきことを提案している。福沢は、朝鮮政府との委託留学生に関する契約のため朝鮮に渡っていた鎌田栄吉からこの話を聞き、同人宛の書簡で「速成者とほんとうの学者」に分けることは良案であると述べている[13]。これは元来福沢の持論であった。先に述べたように、慶應義塾はすでに漢学などの素養がある人物を分けて教育する方針であり、また福沢は後にも述べるように、学問は実践を伴ってこそ意味があると考えていた。受入に先立ち井上に対して「朝鮮之学生一三〇いよいよ出発之由、当塾ニても夫れ夫れ用意致し居候。少しニても日本語に通するやう相成候上ハ、方〻へ出して実地之見習可然存候。過日一寸静岡へ参候節も、知事小松原へ面会、いよいよ朝鮮人が日本語を覚へたる上ハ、其県下の村役所郡役所なとニ使用して実地の見習を頼むと申置候。書籍上之知識よりも、地方政事之実を見覚ゆること、朝鮮の為めにハ、遙ニ利益と被存候」と、少しでも日本語が通じるようになれば、地方自治体などで実地の見習をすべきであり、実際に知人の静岡県知事小松原英太郎に引受を依頼したことにも言及し、「書籍上之知識」よりも「地方政事之実」を見る方が「朝鮮の為めにハ遙ニ利益」と述べている[14]。

明治28年８月には、慶應義塾と朝鮮学部大臣李完用との間で留学生の委託契約が締結された。この委託契約においても、これまでに述べた教育方針が踏襲されている。第１条では、慶應義塾において留学生が学ぶのは、専門的な学問ではなく「普通の学科」であること、年少者についてはさらに先の学問を履修することが定められた。第３条においては「卒業」もしくは「普通の学科を修得したる者」は、「専攻学業」修得のため、他の官立・公立・私立学校へ入学させるか、もしくは「実地を習練せしむる為め適応の手続」を慶應義塾が行うこと、第４条では慶應義塾外の機関に行っても、「進退行為及其他一切の監督」は慶應義塾が担当する、すなわち身元を引受けることが定められている。委託契約締結以後は、朝鮮留学生学則と全15条の条文に則って留学生活が行われ、勤惰表への記載者が少ないのは、そのためではないかと考えられる。

表 4

	1883.3	1884.10	1894.11	1895.3	1895.5	1895.6	1895.7	1895.8	1895.9	1895.10	1895.11	1896.1	
15～19		1			37	2		1	1		5		47
20～24	1				52	15	1		5	1	1	1	77
25～29		1	2	1	25	9	2		17		4		61
30～34									7		1		8
35～39									3		1		4
40～41										1			1
	1	2	2	1	114	26	3	1	33	2	12	1	198

朝鮮留学生学則は今のところ残存していないが、明治26年８月から28年７月までの『慶應義塾学事及会計報告』によれば、朝鮮からの留学生に対しては「本邦ノ語学」を修めることが「最急先務」と考えられ、普通科１年・高等科８か月の課程が計画された。すでに朝鮮において日本語を履修していたもの、および来日後の習熟進度が早い若干名が、明治28年末に普通科卒業の見込みとされている[15]。

５）明治28年９月の留学生

契約締結後の明治28年９月に、再度まとまって入学する留学生は、それまでの留学生とは性格が異なっている。入社帳データの一覧に見られるように、朴莊和を除き記載事項が少ない[16]。また年齢も表４に見られるように高い。彼らは、『慶應義塾百年史』によれば国王親選の官僚たちで[17]、熱心に学問を学ぶという姿勢ではなかったようである。

福沢は明治28年10月13日に娘婿の清岡邦之助に宛てた書簡で「前ニ来りし者百四十」は「唯之学生」だが、「後ニ来りし四十名」は「閔家之下ニ生息」する者と書いている。中には「ほんとうの閔氏」も多く、「閔泳喆なと申者ハ王妃之姪と称して学生之取締り、大威張」で、すなわち40名は遊学ではなく「遊覧紳士」であるとしている[18]。この書簡によれば、彼らは10月８日に乙未事変が起こると、動揺して３日間徹夜で議論をし、傍からの忠告には耳を貸さず、5、6名を残して大急ぎで帰国した。福沢は彼らに対して、ただ「気之毒ニ思ふのみ」と記している。

先行研究では、８月の段階で福沢が「速成者とほんとうの学者」と言っているうちの、速成者として位置づけられるのが９月以降に来た学生と捉えられているようであるが、そうではないと考えられる。「速成者」と「ほんとうの学者」の境は17、8歳に置かれているのであり、福沢が言うと

ころの区別は、それまでも慶應義塾が行っていたように、学問の基礎から教育するか、すぐに実践教育を中心に行うかという区別であり、いずれも学問を志すものは「純粋之文明学者」に育てたいと考えていた。朴泳孝失脚後再び権勢を取り戻した閔妃・驪興閔氏に連なることで来日した人びとに対しては、「ほんとうの学者」や速成者（実践的な人材）に成る人材ではない、政治的な配慮による視察団と考え、ゆえに「遊覧紳士」と位置づけていた。たとえば「学生之取締り、大威張」であった閔泳喆は、のちに日英同盟後日露の緊張が高まる中で、高宗に日本との盟約を勧める役回りとして登場する。

興味深いのは、残りの留学生の反応である。福沢は同じ書簡で彼らは「何れも平気」で、むしろ「極ミ内実を叩けバ、或ハ窃ニ得意」になっている者もあると述べている。彼ら自身にも「遊覧紳士」とは違うという自負があったことがわかる。

6）明治28年10月以降の入学生

入社帳には、10月入学者が２名見出されるが、11月入学者の後に記載されており誤記の可能性もある[19]。いずれにしろ10月以降の入学生15名は、乙未事変以後の入学と考えられ、９月の入学生とはまた異なる存在であろう。年長者も存在し、金鼎禹と金慶稙（35歳・15歳）のように親子で入学している例もあるので、「遊覧紳士」的人物が混在するといえる[20]。

その後、韓国内の政治情勢の変化によって、留学先が検討されるようになり、朝鮮政府と慶應義塾との契約も打ち切られることになった。最初に慶應義塾側に連絡があったのは、明治29年３月中旬ごろと考えられ、３月20日付で福沢が小幡篤次郎に宛てた書簡では、朝鮮政府から公使館の山崎英夫を通じて留学生召還の話があったが、慶應義塾は学務衙門と「約束」をしているのであり、学務大臣から正式な通知が来るまではそのままにすると述べている[21]。また３月25日付石河幹明宛の書簡では、前日に朝鮮の公使と「分らぬ話」に１日費やし、今日は動揺する学生たちを説得したとある[22]。「分らぬ話」とは、代理公使が留学生の「勤堕」を検査し、身体健康・品行方正・学業勤篤な50名のみを選んで留学続行を許可し、残りは召還するというものであった。代理公使の李台植は学生たちに直接、学業の停止を求めたようである[23]。外部協弁高永喜から日本弁理公使小村寿太郎に「慶應義塾学徒一事」について連絡があったのは明治29年４月２日付

で、慶應義塾に正式な申し出があったのは12月28日であった。さらに慶應義塾が委託留学生の未払い分の学資金を受け取り、また契約規程上の学費や学生の帰国旅費を入手したのは、翌30年６月22日のことであった。学生たちは、日本留学を継続するための募金活動を行い、魚璿善・申海永・金鎔済による陳情書が提出された。外務省は明治30年12月より補助金の支給を決定し、学生たちは引き続き慶應義塾に委託されることになった。

この時期は明治28年５月に入学した金東完の勤惰表の記録が残るのみである。前述のように明治29年に、中等教育課程の普通部が普通科・高等科・別科に分かれ、金東完は普通科４等に在籍している。記録は明治31年１月～４月期までだが、慶應義塾は明治31年４月に教育課程の改革を行い、初等教育から高等教育までの一貫教育制度を確立し、そのため成績の記録も形を変えている。金東完の記録は「及第」で終わっている。

金東完の成績が記録されている科目は、明治30年１月～４月期が「国語漢文」「英語」「訳読」「万国史」「日本歴史」「数学」「日本習字」「図画」「体操」、同年５月～７月期、９月～12月期が「国語漢文」「英語」「英文法」「地理」「歴史」「数学」「日本習字」「図画」「訳読」「体操」（９月～12月期は「数学」と「体操」の記録がない）、明治31年１月～４月期が「国文」「英語」「英文法」「訳解」「地理」「数学」「日本習字」「図画」「体操」となっている。彼は日本人とほぼ同じ授業を受けていたと考えられる。

７）留学生の出身地および帰国事情

次に入社帳に記載された出身地別人数は、表５の通りである。京城出身者が多数を占めている。しかし都会出身の彼らにとっても、留学生活で最初の戸惑いは風習の相違であった。

兪致衡の日記によれば、５月15日（旧暦４月21日）は、胸が詰まり涙を止めることができない日になった。朝７時に一行は江木商店に行き、写真を撮った。江木商店は福沢をはじめ、慶應義塾の教員や学生がよく利用し、学内を撮影した写真も多く残している写真館である。そして午後７時になると、今度は髪を切り日本服（和服ではなく洋服と思われる）を着ることになった。先に入学していた尹致旿・魚允廸・朴羲秉等の姿を見れば、いずれそのようになることを想像していたではあろうが、「事勢」はやはり避けることはできず父母から与えられたものを削り去る、「脱去故国之文物　削去父母之血肉　胸隔涙掩　未以言之」となった。留学生たちは悲し

表５

出身地	人数
京城	133
京畿道	33
忠清道	11
平安道	6
慶尚道	5
江原道	3
咸鏡道	3
黄海道	3
全羅道	1
	198

表６

	人数
戸主	22
長男もしくは長孫・長子	100
次男以下	62
未詳	14
	198

みのあまり、寄宿舎に帰ると部屋にこもり、「大君主陛下万歳」と叫んで西側の壁（朝鮮の方角）に向い、前に冷水を置いて再拝しながら「大声慟哭」したという。

また戸主、長男などの別を見ると、次男以下に比べて戸主や長男の数が多い（表６）。「学部来去文」には、慶應義塾留学中に本人の病気だけでなく、親の病気や喪のために帰国しなければならなかった学生たちの、再留学などについての記載がある。そこには金敬済・李鍾華・卞志浣・徐丙武・朴正善・崔奎福・嚴柱一・朴炳憲・劉文相・金重漢などの名前があがっている[24]。この史料については、次回報告したい。

３．『大韓帝国官員履歴書』にみられる日本における就学就職状況および帰国後

次に留学生たちの進学先や、帰国後の職業について考えたい。前述のように阿部洋氏は、『親睦会会報』に見られる記事から、「慶應義塾普通科卒業後の進路」について86名分の表を作成されている[25]。本稿では官員履歴を基に報告したい。官員履歴より、慶應義塾での修学記事および進学・研修先の記載が拾えた人物は表７の通りである。進学先である農科大学、高等工業学校、東京専門学校などは、ほぼ現在も大学として高等教育を行っている機関である。後身の学校名については（　）で示した。成城学校は陸軍士官学校への予備学校であったが、現在は普通科の男子高等学校である。

官員履歴に見られる各人の記載は、後掲〈**資料**〉の通りである。また判

表 7

	姓名	入学年齢	慶應義塾での就学に関するデータ（官員履歴および入社帳による）					卒業後の日本における		
25	金教先	16	普通科	1895.3/5	入			成城学校（成城高校）	1896.9	入
					卒			予備科	1898.9	卒
26	洪仁杓	15	普通科	1895.5	入	1年3ヶ月		東京高等工業高校（東京工業大学）	1896.9.11	入
				1896.7.25	卒			応用化学科卒業	1899.7.8/8	卒
28	魚璿善	25	普通学	1895.3/5	入	2年		東京専門学校（早稲田大学）	1897.2ヵ	入
				1897.2ヵ	卒			政治経済学校外生・講義録合修（自修）		
31	魚潭	15	普通科	1895.4.2/5	入	3～4ヶ月		成城学校（成城高校）	1895.7.27	入
				1895.7.25/7	卒				1897.11.28	卒
36	申佑善	23	普通科	1895.5	入	1年1～2ヶ月		慶應義塾高等科		入
				1896.5.25/6.15	卒				1897.3.31/3.15	卒
37	金東完	(16)	普通科	1895.4.24/5	入	2年～2年1ヶ月		慶應義塾中学部（高等科ヵ）	1897.5.1	入
				1897.4.15	卒				1902.4.15	卒
40	尹世鏞	23	普通科	1895.5	入	1年3ヶ月				
				1896.7.29	卒					
53	金鴻南	21	普通科	1895.5	入	1年3～5ヶ月		成城学校（成城高校）	1896.9/10	入
				1896.7.20/9	卒				1898.11.15	卒
66	安衡中	25	普通科	1895.6	入	1年2ヶ月		東京高等工業高校（東京工業大学）	1896.9	入
				1896.7	卒			染織工科（工学）卒業	1899.7	卒
73	尹邦鉉	18	普通科	1895.5	入	11ヶ月				
				1896.3	卒					
87	安昌善	25	普通科	1895.5	入	2年3ヶ月		東京築地工手学校（工学院大学）	1897.9	入
				1897.7	卒			採鉱冶金科卒業	1899.7	卒
90	金亨燮	18	普通科	1895.4.13/5	入	1年10～11ヶ月		成城学校（成城高校）	1897.2	入
				1897.2	卒				1898.11	卒
101	張明根	23	普通科	1893.12.28/1895.5	入			成城学校（成城高校）	1894.2.9	入
					卒					卒
116	金寛鉉	21		1895.5	入			成城学校（成城高校）	1894.11.19	入
								日本体育会（日本体育大学）射撃科卒業	1897.11.15	卒
								成城学校（成城高校）青年科	1898.12.22	卒

就学に関するデータ			日本における就業に関するデータ		帰国時期	備考
陸軍士官学校	1898.11.30	入	野戦砲兵第一聯隊見習		1900.6	再留学
	1899.11	卒				
			製薬会社事務見習		1900.7	
			大蔵省各局課実務見習	日本銀行各局事務見習（2年・完了）	1898.10	
陸軍士官学校	1897.12.1	入	野戦砲兵第一聯隊見習			漢城師範学校
	1898.11.21	卒				
慶應義塾大学部経済学（理財科ヵ）		入	大蔵省見習	日本銀行事務見習	1901.7.15/10.5	
	1900.7.31/7.15	卒				
東京帝国大学農科大学実科	1902.9.15	入	土壌分析実地試験（農事試験場）		1905.12.10	
農科卒業	1905.7.15	卒				
			静岡県庁司法行政事務見習（1年4ヶ月・修了証書）	内務省各局課行政事務見習（2年・修了証書）		
陸軍士官学校	1898.12	入	陸軍歩兵第二聯隊見習			官立日語学校
	1899.11.15	卒				
			地方工場見習		1900.11	
			司法省見習（2ヶ月）	農商務省（1ヶ月）	1896.7	
			佐渡銀鉱（3年）			官立日語学校
陸軍士官学校	1898.12.1	入	第一師団歩兵第三聯隊見習（7か月）			再留学
	1899.11	卒				
東京士官学校	1894.9.3	入			1895.2.3	再留学
		卒				
陸軍士官学校	1898.12.1	入	陸軍歩兵第三聯隊見習		1905.5	
	1899.11.21	卒				

表７（続き）

	姓名	入学年齢	慶應義塾での就学に関するデータ				卒業後の日本における		
124	金益南	25	普通科	1895.6	入	７ヶ月	東京慈恵医院医学校（東京慈恵会医科大学）	1896.12.12	入
				1895.12.27	卒		医学全科・耳鼻咽喉科卒業	1899.7.30	卒
130	安慶善	22	普通生	1895.6	入	１年５ヶ月	農科大学（東京大学農学部）	1896.11.11	入
				1896.10.15	卒		乙科得業	1899.11.13	卒
135	金東圭	25		1895.6	入				
148	曹秉桂	26	普通科	1895.7					
184	金鼎禹	35	普通	1895.11	入	１年５ヶ月	順天救合社工業予備科（順天高等学校）	1897.3	入
				1897.3	卒			1897.9	卒
187	李憲珪	28		1890.9？/1895.11	入				
				1892.12.25？	卒				
192	尹致晟	19	特別科	1895.11	入	１年１ヶ月	陸軍予備学校	1897.11.28	入
				1896.11.15	卒			1898.11.22	卒

表８

	人名	職業		
25	金教先	陸軍／教員	軍部教育局	
26	洪仁杓	薬剤師	農商工学校／教員	陸軍／教員
28	魚珞善	外国語学校・日語学校／教員	内閣書記官	
31	魚潭	陸軍／軍人		
36	申佑善	陸軍／教員	度支部参事官	
37	金東完	農商工部／技術者		
40	尹世鏞	師範学校	学部書記官	
53	金鴻南	陸軍／軍人・教員		
66	安衡中	農商工学校／教員	工業伝習所／技師	
73	尹邦鉉	農商工部／技術者	内部・法部参事官	裁判所／判事・検事
87	安昌善	技術者		
90	金亨燮	陸軍／軍人・教員		
101	張明根	陸軍／軍人	武官学校／教員	
116	金寛鉉	陸軍／軍人・教員		
124	金益南	医学校／教員	陸軍／軍医	軍部医務局
130	安慶善	警務庁／警察官		
135	金東圭	私立学校／教員	日本郵便電信局	内閣書記部
148	曹秉桂	外部翻訳官		
184	金鼎禹	軍部／技術者	軍器廠製造所／所長	
187	李憲珪	通信司電話課	中枢院議官	警務庁／警務官
192	尹致晟	陸軍／軍人		

就学に関するデータ			日本における就業に関するデータ		帰国時期	備考
内科外科眼科実地見習	1897･9･15	入	東京慈恵医院当直医員		1900.4以前	漢医学官立日語学校
東京衛生成医会実地研習	1897.10.10	卒				
東京法学院（中央大学）校外生	1899.12.1	入			1901.6.28	漢文私塾
			逓信省郵便通信事務見習		1899.12	
					1895.12ヵ	
東京高等工業高校（東京工業大学）機械学	1897.9	入	東京砲兵工廠銃弾製造所見習（1年・銃弾製造法卒業）		1900･10	
	1899.9	卒				
			日本警視庁事務練習		1894.9.30	
陸軍士官学校	1898.12.1	入	騎兵第一聯隊見習		1900.7	
	1899.11.25	卒				

明した帰国後の主な職業は、表８にまとめた。

４．おわりに――慶應義塾の果たした役割――

福沢が慶應義塾において目指した教育は、知識の蓄積ではなく、知識を活かすことであった。彼は、慶應義塾が蚕卵紙の生産所であってはいけないという。蚕卵から蚕卵を作り続けるのではなく、生糸や絹織物に展開できることが重要である。学問は、社会の進歩に役立ってこそ意味をなすと考えていた。ゆえに留学生たちにも、「書籍上の知識」をいかに増やすかではなく、実践を伴う勉学を勧めた。留学生たちが慶應義塾での普通教育（中等教育）を終えて進学した先も、農科や工業、商業など実践的な技術も学ぶことができる機関になっている。

慶應義塾は、彼らが次なる機関で学ぶための土台として、日本語を中心とする基礎教育と、慶應義塾の卒業生あるいは福沢諭吉がもつネットワークによって、彼らに適切な進学先あるいは研修先を紹介し支援するという二つの面で、留学生の新たな学問的展開への仲介を果たしたといえる。先に福沢が静岡県知事に研修受入の依頼をしたことを紹介したが、尹世鏞は静岡県庁司法行政事務見習として、１年４か月を過ごしている。

留学生に関する文献は現在、韓国歴史情報統合システムによって多くが検索できる。今後の課題として、まずは198名に対する個別調査を進め、個別事例を踏まえたうえで、朝鮮からの留学生の全体に関する意味づけを、韓日両方の立場から考えることが必要であろう。

＊官員履歴の調査を王賢鍾、慶應義塾側の資料調査を西沢直子が担当した。

注

1　慶應義塾編『慶應義塾五十年史』、慶應義塾、1907年、p. 539

2　李瓊球編『日本留学100年史』、在日韓国留学生連合会、1988年

3　韓国における先行研究には、**박찬승**「1890**년대** 후반 **도일**（渡日）유**학**생**의 현**실**인** 식 ― 유**학**생친목**회**를 중심으**로**―」『**역사와 현**실』31、1999年。**이태훈**「**한**말 **일본** 유**학** 지식**인의 '근대 사회과학' 수**용**과정과** 특징 ― **'정치' 에 대한 인**식**과** '입**헌정치론'** 을 중심으**로**―」『**이화사학연구**』**제**44**집**、2010年。王賢鍾「**대한제국기 고**종**의 황제권** 강**화와 개**혁 논리」『歴史学報』第208輯、2010年

4　坂井達朗「肥後実学党と初期の慶應義塾（一）―林正明と岡田攝蔵を中心として―」『近代日本研究』第1巻、1985年。高木不二「和歌山県民権家児玉仲児と慶應義塾―租税論の展開を中心として―」同前。河北展生「『慶應義塾入社帳』に見る中津出身者」『近代日本研究』第４巻、1988年。内山秀夫「沖縄縣費第一回留学生」同前。

5　慶応４年閏４月10日付山口良蔵宛。『福沢諭吉書簡集』（全９巻、2001～2003年、以下『書簡集』）第１巻 pp. 90-94

6　入社帳は、慶應義塾福沢研究センター編『慶應義塾入社帳　復刻版』（全５巻、1986年）が刊行されている。また勤惰表は、慶應義塾福沢研究センター編『マイクロフイルム版福沢関係文書　福沢諭吉と慶應義塾』（全240リール、雄松堂出版、1989～1998年）で確認できる。

7　『書簡集』第３巻こと「朝鮮留学生の来日」pp.367-368。明治16年11月21日付井上角五郎宛書簡。『書簡集』第４巻 p. 37

8　明治17年４月17日付および６月１日付飯田三治宛書簡。『書簡集』第４巻 pp. 127-128、pp. 150-151

9　慶應義塾の各課程については、『慶應義塾史事典』（慶應義塾、2008年）参照。

10　市川政明編『日韓外交史料』第４巻、原書房、1979年、pp. 241-247

11　原文は漢文で、息子である兪鎮午氏による韓国語訳が、『法学』第24巻４号（ソウル大学、1983年）に掲載されている。pp. 148-168

12　慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻（前）、慶應義塾、1960年、pp. 148

13　明治28年８月22日付鎌田栄吉宛書。『書簡集』第８巻 pp. 93-95
14　明治28年４月19日付井上馨宛書簡。『書簡集』第８巻 pp. 56-58
15　慶應義塾編『自明治廿六年八月至明治廿八年七月　慶應義塾学事及び会計報告』pp. 49-50
16　朴莊和は後に続く２人の記載が、当初の９月入学から11月入学に記載が訂正されており、朴も記載ミスの可能性がある。
17　前掲中巻（前）p. 151
18　『書簡集』第８巻 pp. 104-106
19　但し、入社帳は前述のように担当者がまとめて記入するため、日付が前後することもあるので、断定はできない。
20　当時特に両班階級など身分が高い、あるいは裕福な家には早婚の因習があり、「東京遊学日記」を遺した兪致衡も16歳で結婚している。
21　『書簡集』第８巻 p. 169
22　『書簡集』第８巻 p. 170
23　前掲阿部洋「福沢諭吉と朝鮮留学生」pp. 77-78
24　奎17798　第５冊・学案第２号、奎17798　第２冊・学部来案第２号ほか
25　前掲阿部洋「福沢諭吉と朝鮮留学生」p. 72。今回の調査結果とは異同がある。

＊本稿では原則として、漢字は通行体を用いている。

〈資料〉

凡例

1）大韓帝国官員履歴書　冊数　および　影印本（大韓民国文教部国史編纂委員会、探求堂、1972年）ページ数

複数ある場合は番号を振り、内容に異同がある場合に典拠はその番号で示した。

学歴・研修歴・職歴の定本については、→のあとに番号で示している。

2）本貫地

3）生年月日

4）住所

表記上の違いで同じ場所を示していると思われる場合は、①データを表示した。

5）学歴・研修歴

6）職歴

履歴書における「現在」が特定できない場合は＊で表示した。

7）西暦

履歴に記載されている元号は朝鮮のものであるが、開国503年＝1894年、建陽元年＝1896年、光武元年＝1897年、隆熙元年＝1907年として機械的に換算したものを掲載した。

朝鮮での陽暦の採用は1896年１月１日からである。それ以前の日本での履歴が陽暦か否かは未詳である。

25. 金教先　**김교선**

1）①４冊113　②19冊508　　→５）①　６）①

2）慶州

3）1880年10月11日

4）漢城 西署 仁達坊 社稷契 社稷洞 第六十統 第三戸

5）1894年　９月 官立小学校に入る

1895年　３月 日本留学の命を受け、慶應義塾に入り普通科を修め卒業

1896年　９月 成城学校修予備科に入る

1898年　9月　卒業
1898年　11月30日　陸軍士官学校に入る
1899年　11月　卒業し、野戦砲兵第一聯隊附き見習
1900年　6月　命回国
6）1900年　7月17日　任陸軍参尉
1900年　10月27日　命日本留学
1900年　12月5日　命回国（②では3日）
1901年　4月19日　任陸軍砲兵参尉補
1901年　9月　陸軍武官学校教官
1902年　1月　命西北検察使隨員被選
1902年　7月　拘拿
1902年　10月30日　免本官
1904年　2月　流終身定配于薪智島
1905年　5月　放逐鄕里
1905年　9月　蒙放　②
1905年　10月6日　免懲戒任陸軍砲兵参尉
1905年　10月27日　補陸軍研成学校教官
1906年　6月12日　免本職陞副尉陸軍研成学校教官
1906年　7月20日　陞陸軍砲兵正尉
1906年　12月12日現在　九品陸軍研成学校教官陸軍砲兵正尉　②
1907年　4月30日　補軍部教育局編修課員
1907年　5月14日　移補陸軍研成学校教官
1907年　6月7日　移補侍衛砲兵隊長補
1907年　6月12日　軽謹慎参個月
1907年　8月26日　解放
1907年　8月26日　補陸軍武官学校教官
1907年　9月17日　陸軍武官学校教官陸軍砲兵正尉九品

26. 洪仁杓　홍인표

1）①10冊268　②42冊908　　→5）①　6）①
2）南陽
3）1881年9月29日
4）漢城 西署 仁達坊 内需司契 内需司洞 第二十三統 第一戸

5）1895年　3月　学部派遣に選ばれ、日本慶應義塾に入学
1896年　7月25日　普通科卒業
1896年　9月11日　東京高等工業学校に入学
1899年　7月8日　卒業（②では8月応用化学科卒業）
1899年　8月　日本大阪製薬会社事務見習
1900年　7月　畢務還国
6）1902年　6月28日　官立醫学校附屬病院製薬師勤務
1904年　10月7日　畢務
1904年　10月8日　任農商工学校教官　判任六等
1906年　6月26日　陞六級俸
1906年　9月24日　依免
1906年　12月24日　任陸軍幼年学校教官奏任四等七級俸
1907年　8月26日　官制廃止
1907年　8月26日　任陸軍武官学校教官
1907年　9月17日現在　陸軍武官学校教官九品

28. 魚瑢善　**어용선**

1）①13冊349　②27冊667　③33冊761　④34冊782　→5）①　6）③
2）咸従
3）1869年12月22日
4）漢城 西署 盤松坊 盧僉正契 尾洞 第九十九統 第八戸
5）1895年　3月　政府留学生として日本東京慶應義塾で満2年間普通学を修め、卒業
1896年　2月　日本東京専門学校で満1年間政治経済学を修め、また校外生として講義録合修を受ける（④では自修）
1897年　4月　大藏省で各局課実務見習、また日本中央金庫（日本銀行）で各局業務見習。2年間で事務見習完了
1898年　10月　帰朝
6）1898年　11月29日　任中枢院議官　叙奏任官
1899年　1月3日　免官（①では免官　用人建議捧現告）
1899年　3月　私立光興学校校監兼教師視務
1901年　1月　廃校休任（①では廃校ではなく啓報）
1901年　1月3日　満期免懲戒

1905年　2月　私立普昌学校校監兼教師視務
1906年　5月　辞任（①では解任）
1906年　5月31日　任学部視学官　叙奏任官四等七級
1906年　9月　命学部教員検定委員会常任委員
1906年　12月　受賞金二十五円
1907年　1月24日　紀念章祇受　皇太子嘉礼時
1907年　6月22日　転任官立漢城日語学校教官　奏任官四等七級
1907年　7月4日　転任内閣書記官　奏任官四等七級
1907年　7月4日　命外事課長
1907年　7月8日　命任臨時帝室有及国有財産調査局幹事
1907年　8月28日　紀念章祇受　即位礼式時
1907年　9月6日　陞六品（①では陞六品　追封皇后時褥席執事）
1907年　10月9日　陞正三品通政大夫（①では陞正三品　追封完王時捧出冊官）
1907年　10月現在　内閣書記官正参品　①
1907年　12月　受賞金参十二円二十二銭二厘
1907年　12月　受賞金百八十七円五十銭　臨時帝室有国有財産調査局
1908年　1月1日　命繙訳課長
1908年　6月1日　陞叙奏任官三等六級
1908年　7月7日　私立華東学校長被任
1908年　7月23日　帝室有国有財産調査局廃止に対して慰勞金三百円を受ける
1908年　12月　受賞金八十七円五十銭
1909年　1月　私立長湍普昌学校長被任
1909年　6月1日　陞五級
1909年　8月12日　外事課長代弁を被命
1909年　12月　金百円
1910年　2月15日　紀念章祇受　西南御巡幸時
1910年　2月21日　命外事課兼勤
1910年　2月　命内閣雇臨時試験委員
1910年　5月　私立華東普通学校長辞免
1910年　6月11日　命外事課長代弁
1910年　8月16日　叙勲五等賜八卦章

1910年　8月28日　陞従二品嘉善大夫
1910年　8月現在従二品　五等　前内閣書記官

31. 魚潭　**어담**
1）13冊350
2）咸従
3）1881年5月7日
4）漢城　西署　盤松坊　新橋洞　第四十九統　第八戸
5）1894年　9月12日　漢城師範学校に入る
1895年　3月23日　日本国留学を命ぜられる
1895年　4月2日　日本慶應義塾入学
1895年　7月25日　同塾普通科卒業
1895年　7月27日　日本成城学校に入る
1897年　11月28日　日本成城学校卒業
1897年　12月1日　日本陸軍士官学校に入る
1898年　11月21日　日本陸軍士官学校卒業
1898年　12月1日　野戦砲兵第一聯隊見習
6）1900年　7月18日　任砲兵参尉
1901年　4月19日　補陸軍武官学校教官
1901年　5月1日　一週日重謹慎
1901年　8月7日　参週日重謹慎
1901年　12月28日　一週日重謹慎
1904年　4月5日　任砲兵副尉
1904年　5月11日　陞六品
1904年　7月25日　陞任砲兵正尉
1904年　7月　補陸軍武官学校副官
1904年　8月31日　命軍制議定所委員
1904年　9月22日　陞任砲兵参領
1904年　9月27日　補参謀局員
1904年　9月27日　命日本軍隊接待委員
1905年　3月2日　陞正三品
1905年　3月10日　任侍従武官
1905年　4月24日　陞任砲兵副領

1905年　5月20日　叙勲四等太枢章
1905年　7月15日　陞従二品
1905年　8月4日　命侍従院副卿　叙勅任官参等
1905年　8月12日　任侍従武官
1906年　4月11日　陞叙勲参等八卦章
1906年　5月4日　受日本国勲四等旭日章
1906年　5月4日　命日本国凱旋視察
1906年　9月9日　命日本国軍務視察
1906年　7月11日　復命
1906年　10月18日　陞任砲兵正領
1907年　4月20日　陞嘉義
1907年　7月21日　停職拘拿
1907年　7月26日　放免
1907年　9月3日　補軍部附
1907年　9月30日現在　軍部附陸軍砲兵正領従二品

36. 申佑善　신우선

1）①23冊609　②23冊611　③35冊800　→5）①　6）③
2）平山
4）①漢城　北署　嘉会坊　齋洞　第六統　第四戸
②漢城　中署　貞善坊　漢君契　下漢洞　第五十七統　一
5）1895年　3月23日　派遣留学生として日本国に往く
1896年　5月25日　普通科卒業（②では6月15日）
1897年　3月31日　高等科卒業（②では3月15日）
1897年　9月10日　また専修学校で業を受ける
1900年　7月31日　經濟学卒業（②では7月15日）
1901年　6月30日　日本国大藏省事務見習（②では8月1日）
1901年　7月1日　また日本銀行に入り事務見習
1901年　7月15日　還国（②では10月5日）
6）1904年　7月16日　任法官養成所教官　判任六等
1905年　1月13日　依願免本官
1905年　4月9日　任陸軍武官学校教官　奏任六等
1906年　1月3日　転任陸軍幼年学校教官　奏任六等

1906年　5月22日　転任度支部水道局事務官　奏任四等七級
1906年　7月27日　転任度支部参書官　奏任四等七級
1907年　2月10日　丁母憂
1907年　4月9日　起復被命
1907年　6月20日　任度支部書記官　奏任四等七級
1907年　6月27日　陞奏任参等六級

37. 金東完　김동완
1）19冊502
2）慶州
4）漢城　南大門外　蓮花峯
5）1895年　4月24日　官費留学生として日本東京慶應義塾特別普通科に入る
1897年　4月15日　慶應義塾普通科卒業
1897年　5月1日　慶應義塾中学部一年級に入る
1902年　4月15日　慶應義塾中学部卒業
1902年　9月15日　東京帝国大学農科大学実科一年級に入る
1905年　7月15日　東京帝国大学農科卒業
1905年　8月1日　農事試験場において分析土壌実地試験
1905年　12月10日　帰国
6）1905年　12月22日　任農商工部技師　叙奏任官四等

40. 尹世鏞　윤세용
1）①8冊225　②24冊636　③39冊841　→5）③　6）③
2）坡平
3）1873年10月28日
4）①漢城　西署　仁達坊　英嬪契　社稷洞　第参十一統　第十一戸
③京西署　仁達坊　社稷洞　参十一統　十一戸
5）1895年　3月　官費生として日本東京に留学
1896年　7月29日　慶應義塾普通科卒業
1896年　8月～1897年　11月　静岡県庁地方行政事務を見習い、修業了証書を受ける
1897年　11月　地方政治専門で内務省に入り各局課行政事務見習

1899年 10月 修業了証書を受ける
6）1904年 8月～1907年 6月30日 私立中橋義塾普成学校贊文学校講師
職務に従事 教授学課
1905年 12月19日 任学部主事 叙判任官八級
1906年 6月 命師範学校第一回速成科書記兼務
1906年 9月1日 命学部教員検定委員会書記兼務
1906年 12月14日 命師範学校第二回速成科書記兼務
1906年 12月31日 陞七級俸
1906年 12月31日 受賞金十二圜
1907年 6月22日 任学部視学官 叙奏任官四等八級
1907年 7月28日 命教員検定会委員
1907年 8月2日 依願免本官
1907年 8月2日 任学部書記官 叙奏任官四等八級

53. 金鴻南 김홍남

1）①5冊157 ②19冊507 →5）① 6）①
2）安義
3）1875年 12月27日
4）①漢城 南署 長洞
②漢城 西署 仁達坊 奉常寺前 一百参統 十二戸
5）1894年 3月 官立日語学校入学
1895年 3月 日本留学派遣
1895年 5月 慶應義塾に入学
1896年 9月 普通科卒業（②では7月20日）
1896年 10月 成城学校に入学（②では9月）
1898年 11月 成城学校中学科卒業（②では11月15日）
1898年 12月 陸軍士官学校に入学
1899年 11月 陸軍士官学校卒業（②では11月15日）
1901年 12月 陸軍歩兵第二聯隊見習
1900年 7月 陸軍歩兵第参聯隊見習を畢える
6）1900年 7月 任陸軍歩兵参尉（②では7月18日）
1901年 2月 帰国 ②
1902年 4月 任陸軍参等軍司

1902年　4月　補鎮衛六聯一隊餉官
1902年　9月　遊覧次渡日本
1903年　2月10日　免本官　②
1904年　2月　陸軍歩兵第参十一聯隊見習
1904年　6月　満洲従軍
1905年　7月　帰国
1905年　8月　陸軍幼年学校学徒隊尉
1905年　8月1日　任陸軍歩兵参尉　補陸軍幼年学校学徒隊附　二週日重謹慎　②
1905年　9月　二週日重謹慎　失責事
1905年　10月　陞陸軍歩兵副尉（②では10月27日）
1906年　2月　派遣京城各隊軍物検査委員
1906年　7月　陞陸軍歩兵正尉
1906年　7月　移補陸軍武官学校教官
1906年　7月　兼侍衛歩兵第一大隊教官
1906年　7月20日　任陸軍歩兵正尉　補陸軍武官学校教官
1906年　12月10日現在　九品陸軍武官学校教官陸軍歩兵正尉
1907年　2月　兼侍衛歩兵第二大隊教官
1907年　8月26日　解放
1907年　8月26日　補陸軍武官学校教官

66. 安衡中　안형중

1）①15冊395　②24冊624　③24冊625　→5）③　6）①
2）順興
3）1870年11月11日
4）①漢城　中署　長通坊　義城政契　中部洞　第四十参統　第参戸
②漢城　南署　薫陶坊　政丞契　第二十一統　参戸
③漢城　南署　仁峴
5）1895年　3月　官費生として日本東京慶應義塾に留学
1896年　7月　慶應義塾普通科卒業
1896年　9月　日本東京高等工業学校に入学
1899年　7月　右染織工科卒業（②では「工学」卒業）
1899年　7月　見習地方工場実地事務（①では8月、②では9月）

1900年 10月 右見習畢了（①では11月）
1900年 11月 承部訓帰国 ②
6）1904年 7月6日 任農商工学校教官 叙判任官六等参級俸
1904年 7月7日 任農商工学校教官 判任六等参級
1905年 7月14日 夏期講習臨時繙訳委任被命
1905年 8月3日 陽川郡旧駅土調査委任被命
1906年 6月6日 陞任農商工学校教官 奏任四等八級
1906年 12月11日現在 農商工学校教官九品
1907年 3月5日 転任工業伝習所技師 奏任四等七級
1907年 9月30日現在 工業伝習所技師九品
丁丑1月 遭父喪

73. 尹邦鉉 윤방형

1）①226 ②24冊632 →5）① 6）①
2）坡平
3）1875年1月30日
4）①漢城 北署 陽徳坊 桂洞 第二統 第二戸
5）1881年 家庭にて就学
1895年 3月 日本東京に留学、慶應義塾普通科で修業（②では2月留学、同年12月卒業）
1895年 12月から1896年7月まで 法務省内務省見習 ②
1896年 3月 卒業
1896年 4月 見習司法省
1896年 6月 見習農商務省
1896年 7月 還国
6）1896年 8月27日 任農商工部技師 奏任六等 ②
1897年 10月14日 陞六品 皇帝之宝陪進差備時
1898年 2月17日 陞叙奏任五等
1899年 6月18日 陞叙奏任四等
1899年 6月14日 陞正三品
1899年 10月16日 依願免本官
1899年 10月25日 任中枢院議官 叙勅任官四等
1900年 10月27日 命侍従院分侍従

1901年 10月18日 疏遞
1901年 10月 任内部会計局長 叙奏任官参等給二級俸
1901年 10月25日 移任内部参書官 叙奏任官二等
1901年 12月6日 移任法部参書官 叙奏任官二等
1901年 12月23日 移任漢城裁判所判事 叙奏任官二等給二級俸
1903年 7月7日 依願免本官
1903年 7月7日 命法律記草委員
1903年 7月8日 兼任法官養成所教授
1903年 10月13日 任平理院判事 叙奏任官二等
1904年 2月2日 移任漢城裁判所判事 叙奏任官二等
1904年 3月20日 免本官 罪囚反獄事
1904年 4月23日 免懲戒
1905年 1月19日 命法律記草委員
1906年 12月19日 法官詮考被選
1906年 12月19日 任漢城裁判所判事 叙奏任官二等
1907年 8月4日 依願免本官
1907年 8月6日 弁護士記録公告
1907年 12月31日現在 正三品（②では正三品漢城裁判所判事）

87. 安昌善 **안창선**
1）40冊856
4）漢城 南署 棗洞 六十参統 二戸
5）1894年 2月 京城官立日語学校に入学
1895年 3月 日本に留学し東京芝区慶應義塾に入る
1897年 7月 普通科卒業
1897年 9月 東京築地工手学校に入学
1899年 7月 採鑛冶金科卒業
1899年 9月 実地研究として日本佐渡銀鉱に出張し、参年従事
6）1902年 2月 従事于日語学校教員
1905年 2月 日本軍隊通訳として清国に赴く
1905年 12月27日 任農商工部技手 判任八級
1906年 6月29日 特陞七級
1906年 6月29日 陞六級

90. 金亨燮　**김형섭**

1）①５冊153　②19冊507　　→５）①　６）①

2）晋州

3）1878年１月７日

4）①漢城 北署 広化坊 苑洞契 苑洞 十二統 第二戸
②漢城 西署 仁達坊 内需司契 上大昌洞 第二十一統 十戸

5）1895年 ３月15日 日本国留学生に選ばれる
1895年 ３月17日 日本国留学を命ぜられる
1895年 ４月13日 日本東京慶應義塾に入学
1897年 ２月 慶應義塾普通科を卒業（②では修業23か月）
1897年 ２月 成城学校に入学
1898年 11月 成城学校を卒業（②では修業34か月）
1898年 12月１日 陸軍士官学校に入学
1899年 11月 陸軍士官学校を卒業（②では修業12か月）
1899年 12月 見習士官として第一師団歩兵第三聯隊に入営
1900年 ６月 見習を畢了し退営（②では在営見習７か月）

6）1900年 ７月17日 任陸軍歩兵参慰 叙奏任六等
1900年 ９月27日 再命日本国留学
1901年 ３月 命回国
1901年 ４月19日 補陸軍武官学校教官
1901年 10月 命派遣日本国陸軍大機動演習陪観
1901年 11月13日 叙日本国勲六等旭日章
1902年 10月30日 免官（②では免本官）
1904年 ３月 全羅南道智島流配
1905年 ５月９日 解配仍放逐郷里
1905年 ９月 解放逐郷里
1905年 10月６日 免懲戒任陸軍歩兵参尉
1905年 10月23日 補陸軍武官学校学徒隊附
1906年 １月16日 命侍衛歩兵第二大隊教官　②
1906年 ２月21日 解任侍衛歩兵第二大隊教官　②
1906年 ４月 命徴上歩兵第二大隊教官　②
1906年 ６月12日 陞陸軍歩兵副尉（②では陞陸軍歩兵副尉 奏任五等）

1906年　7月2日　解任徴上歩兵第二大隊教官　②
1906年　7月2日　命侍衛歩兵第一大隊教官　②
1906年　7月9日　解任侍衛歩兵第一大隊教官　②
1906年　7月9日　命徴上歩兵第二大隊教官　②
1906年　7月9日　陞陸軍歩兵正尉
1906年　7月20日　陞陸軍歩兵正尉　奏任四等　②
1906年　7月20日　補陸軍武官学校中隊長
1906年　12月10日現在　九品陸軍武官学校学徒隊附陸軍歩兵正尉　②
1907年　6月7日　任陸軍工兵正尉
1907年　6月　補工兵隊長補
1907年　8月26日　任陸軍砲兵正尉
1907年　8月　補軍部軍務局兵範課員
1907年　9月30日現在　九品軍部軍務局兵器課員陸軍砲兵正尉

101. 張明根　장명근

1）42冊918
4）漢城 北部 松峴 大韓倶楽部内
5）1881年 家庭にて修学を始めた事
1891年　日語学校に入学事
1892年　3月　庭府命令で日本留学生擇定に選ばれ、東京慶應義塾に留学事
1893年　12月28日　右学校普通科を卒業事
1894年　1月　日本各地方を遊覧事
1894年　2月9日　日本東京成城学校に入学事
1894年　9月3日　東京士官学校に入学事
1895年　2月3日　本国公文によって帰国事
1898年　5月3日　武官学校第一会へ再び入学事
1900年　1月17日　武官を卒業事
1900年　4月15日　元帥府命令によって親衛第一聯隊第三大隊に見習事
6）1895年　3月2日　武官学校で機械運動を教授事
1895年　3月30日　軍部訓令で右学校を革罷する時に程学解散事
1900年　1月19日　陸軍歩兵参尉を被任事
1900年　7月22日　鎭衛第五聯隊第二大隊に補職事

1900年　8月5日　右大隊第参中隊第四小隊長を被任事
1900年　8月11日　北青私立武官学校教官を被任事
1900年　11月19日　元帥府命令により甲山留駐隊へ移隊事
1900年　12月21日　雲村へ派出留駐事
1901年　1月11日　参水へ出駐事
1901年　1月28日　羅暖等地で清国紅衣賊と交戦し勝捷事
1901年　6月5日　雲村へ艦隊
1901年　6月27日　西間島飛水里等地で清国餉馬賊と交戦し勝利事
1901年　7月2日　雲村留駐営へ還軍事
1901年　10月9日　白頭山下西大嶺等地で清国紅衣賊と交戦し勝捷事
1901年　12月4日　雲村留駐営へ還軍事
1904年　4月13日　陸軍法院訓令により（北青郡守と公事上相詰事由）右院にて7日間の取調に在事
1904年　7月19日　休職事
1905年　1月10日　洛淵義塾教師に被選事
1905年　11月6日　右塾の教務を辞免事
1906年　3月2日　日本憲司令部通訳として被選服務事
1906年　5月7日　商業を営するために辞職事
1906年　5月20日　農商工部訓令により海産会社創立事務に従事事
1907年　2月19日　慶尚道へ出張事
1907年　7月分　農商工部訓令により営業を革罷事
1908年　2月4日　東洋生命保險株式会社に通訳事務で従事事

116. 金寛鉉　**김관현**

1）19冊501
2）光山
3）1877年3月
4）漢城 中署 上麻洞
5）1894年　4月　日本留学生を命ぜられる
1894年　5月1日　尋常小学に入学し、慶應義塾を卒業
1894年　11月19日　中学成城学校に入学
1897年　11月15日　日本体育会射撃科を卒業
1898年　12月22日　成城学校青年科を卒業

1898年 12月１日 専門陸軍士官学校に入学
1899年 11月21日 士官学校を卒業
1899年 11月31日 陸軍歩兵第三聯隊において見習
1900年 ７月17日 陸軍歩兵参尉に任じられる。
1902（1904ヵ）年 １月 陸軍戸山学校戦術科修業中 開戦時に出戦し停学
1902（1904ヵ）年 ６月28日 満州に従軍し、奉天陥落時飛弾し口部より左頸部まで貫穿
６）1904年 ８月５日 補陸軍武官学校学徒隊附
1905年 ５月 承軍部訓令帰国
1905年 ５月 移補陸軍幼年学校学徒隊附
1905年 ８月11日 典範改正委員
1905年 ９月 陸軍武官学校試験委員
1905年 10月27日 陞陸軍歩兵副尉
1905年 12月20日 任内部参書官
1906年 １月23日 陞正三品
1906年 ７月19日 任内部会計局長
1906年 ７月20日 任陸軍歩兵正尉

124. 金益南 김익남

１）４冊124
２）清風
３）1870年８月11日
４）漢城 中署 堅坪坊 鉢里廛洞 第十統 第七戸
５）1890年 ３月 家塾において業を受け、漢医学を３年学ぶ。
1894年 ９月10日 官立日語学校に入る。
1895年 ５月10日 学部において留学に選ばれ、日本東京慶應義塾で普通科を学ぶ。
1895年 12月27日 普通科卒業証書を受け、優等生として賞品日本外史と万国地図を受ける。
1896年 １月12日 医学専門東京慈恵医院医学校学医学前期に転入する。
1897年 ７月30日 医学前期卒業証書を受ける。
1897年 ９月12日 医学後期を学ぶ。

1898年　9月12日　東京慈恵医院医学校学耳鼻咽喉科学参科に入る。
1899年　7月30日　医学全科卒業証書を受ける。また耳鼻咽喉科修業証書を受ける。
1897年　9月15日　内科外科眼科実地見習。
1897年　10月10日　東京衛生成医会に入り、病人実地研究講論依前実地研習于術を受ける。
1899年　8月10日　東京慈恵医院当直医員として治療従事
6）1900年　4月2日　任医学校教官　叙判任官六等
1900年　7月6日　受東京慈恵医院当直医員証明書
1900年　8月2日　帰国　即為受牒給三級俸教授医学
1900年　11月22日　陞叙奏任官六等給三級俸
1901年　8月　陞二級俸
1901年　10月15日　陞正三品　景祐宮尊封上印時上即別単時
1902年　8月3日　臨時衛生院医師差下
1902年　8月22日　陞一級俸
1903年　12月30日　陞叙奏任官五等
1904年　9月15日　命流行病預防委員
1904年　9月23日　任陸軍三等軍医長
1904年　9月24日　補軍部医務局第一課長
1905年　3月10日　補軍部軍務局医務課長
1906年　4月10日　特叙兼五等八卦章頗多可紀之労
1906年　4月22日　任陸軍二等軍医長
1907年　8月26日　補軍部軍務局衛生課長
1907年　9月30日現在　正三品軍部軍務局衛生課長陸軍二等軍医長勳五等

130. 安慶善　안경선

1）①15冊396　②24冊626　③37冊827　→5）①　6）①
2）本貫地　竹山
3）1874年11月30日
4）漢城 南署 明禮坊 旧楠契 第参十六統 第九戸 京畿道 陽智郡 古東面 花山里
5）1880年　3月18日　安泰善漢文私塾入学

1895年 4月20日 漢文学休業
1895年 5月22日 日本留学生に選ばれ日本東京芝區慶應義塾に入学
1896年 10月15日 慶應義塾普通生卒業
1896年 11月11日 日本荏原郡農科大学に入学
1899年 11月13日 農科大学乙料得業
1899年 12月1日 東京神田区法学院校外生に入る ③
1901年 6月28日 還帰本国
6）1905年 11月31日 被選警務庁権任
1905年 12月30日 叙任警務庁摠巡 叙判任官八級
1906年 7月24日 陞六品 義親王開封時陪従
1906年 12月30日 陞叙判任官七級
1907年 4月18日 減俸 罪人追捕次出張鄉里犯人失捕事
1907年 9月12日 警視庁摠巡六品

135. 金東圭 **김동규**
1） 5冊159
2）固城
3）1871年4月15日
4）漢城 西署 太平坊 太平契 太平洞 第四十九統 第十戸
5）1895年 5月 政府派遣日本国遊学東京慶應義塾入学
卒業 逓信省郵便電信事務見習
1899年 12月 卒業帰国
6）1885年 10月 司勇
1900年 3月 私立普通学校教師
1901年 5月 辞免
1901年 5月 京城日本郵便電信局通信事務員
1906年 3月 通信管理局転任
1906年 12月 辞免
1907年 1月 私立普成館翻訳兼校正員
1907年 7月 辞免
1907年 7月13日 内閣書記郎 叙判任官七級

148. 曺秉柱 **조병주**

1）36冊820
2）昌寧
4）漢城 東署 蓮花坊 統内右契 四十六統 五戸
5）1895年３月 官費留学生として日本東京慶應義塾に行き、普通科の業を受け卒業
1895年 12月 帰国
1903年 ３月 外部見習生に選ばれる
6）1904年 ６月26日 任外部繙訳官補 叙判任官六等

184. 金鼎禹 김정우

1）19冊504
3）1857年１月４日
4）漢城 西署 盤石坊 旧巡庁契 巡洞 第参十参統 八戸
5）1895年 ５月 日本留学東京慶應義塾入学
1897年 ３月 普通卒業
1897年 ３月 東京神田区順天九合社工業預備科入学
1897年 ９月 工業預備科修業
1897年 ９月 東京高等工業学校機械学科入学
1899年 ９月 機械学卒業
1899年 ９月 東京砲兵工廠銃弾製造所見習
1900年 ９月 銃弾製造法卒業
1900年 10月 還本国
6）1894年 11月 任警務庁摠巡 叙判任官六等
1901年 ８月７日 任軍部技手 叙判任官五等
1902年 ４月 任平式院技師 叙奏任官六等
1903年 ７月６日 任軍部技師 叙奏任官六等
1904年 ７月16日 任軍器廠技師 叙奏任官六等
1904年 ９月27日 任陸軍砲兵参領
1904年 10月18日 補軍器廠製造所長
1905年 ３月１日 官制廃止
1905年 ３月18日 補軍器廠長
1906年 ４月３日 重謹慎二週日 軍物管守疏忽事
1906年 10月18日 陞陸軍砲兵副領

＊正三品軍器廠長陸軍砲兵副領

187. 李憲珪　**이헌규**

1）①2冊66　②18冊483　③37冊821　　→5）①　6）①

2）韓山

3）1868年6月10日

4）漢城 西署 盤松坊 尾洞契 尾洞 第参十一統 第二戸

5）1890年 9月 留学のため日本慶應義塾大学に渡る
1892年 12月25日 卒業
1893年 1月 日本警視庁事務練習
1894年 9月8日 隷業
1894年 9月30日 還国

6）1899年 9月5日 任通信司電話課主事 判任官七等
1899年 9月28日 依願免本官（②では通信司電話課主事依願免本官）
1900年 4月12日 任東萊港警務官 奏任官六等
1900年 9月6日 転任中枢院議官 奏任官六等
1900年 9月21日 依願免本官（②では中枢院議官依願免本官）
1905年 4月7日 任警務庁警務官 奏任官六等
1906年 6月29日 陞七級俸
1906年 7月24日 陞六品 義親王授冊時
1906年 11月22日 陞正三品 孝定王后玉宝修補時
1907年 1月27日 陞従二品 皇太子嘉禮時
1907年 6月14日 陞叙三等
1907年 6月14日 陞六級俸
1907年 9月12日 警視庁警務官従二品

192. 尹致晟　**윤치성**

1）8冊235

2）海平

3）1877年3月26日

4）漢城 北署 陽德坊 桂山洞契 桂山洞 第十一統 第九戸

5）1895年 8月10日 遊覧紳士として日本国東京へ行く
1895年 11月5日 慶應義塾特別科に入学

1896年 11月15日 卒業
1897年 11月28日 陸軍予備学校に入学
1898年 11月22日 卒業
1898年 12月１日 陸軍士官学校に入学
1899年 11月25日 卒業
1899年 12月１日 被騎兵第一聯隊見習
6）1900年 ６月25日 被任陸軍騎兵参尉
1900年 ７月14日 出発帰国
1902年 ４月17日 再渡日本国被騎兵第八聯隊見習
1904年 ２月25日 従日本蒲州出往軍
1905年 １月15日 被命回国
1905年 ２月17日 被任陸軍騎兵参尉補侍衛騎帰隊附
1905年 ３月19日 命日本国特派大使隨員
1905年 ３月31日 受日本国叙勲六等旭日章
1905年 ３月25日 陞任騎兵副尉
1905年 ３月29日 陞六品
1905年 ４月28日 帰国復命
1905年 10月10日 陞任騎兵正尉移補軍部軍務局騎騎兵課員
1905年 12月５日 移補騎兵中隊長
1906年 １月10日 命日本国報聘大使隨員
1906年 １月21日 受日本国叙勲四等瑞宝章
1906年 １月13日 陞任騎兵参領
1906年 ２月10日 帰国復命
1906年 ７月20日 移補軍部二課局事一課長
1906年 10月18日 陞任騎兵副領
1907年 ４月20日 陞正三品
1907年 ６月８日 補陪従式官
1907年 ８月24日 移補侍従式官
1907年 ９月７日 侍従武官陸軍騎兵副領正三品勲四等